

山梨県中巨摩郡若草町

二本柳遺跡

—農道建設に伴う中世寺院跡の発掘調査—

1992・3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

山梨県中巨摩郡若草町

二 本 柳 遺 跡

—農道建設に伴う中世寺院跡の発掘調査—

1992・3

山梨県教育委員会
山梨県農務部

序

本書は、富士川西部広域農道関連の農道建設に伴い山梨県中巨摩郡若草町加賀美字山宮地に所在する1991年度に実施した二本柳遺跡の発掘調査報告書であります。

本遺跡が位置する若草町は御勅使川扇状地の末端部に当たっており、これまでは余り遺跡は知られておりませんでした。ところが最近の発掘調査により扇端部からは古墳時代前期から平安時代にかけての集落遺跡が発見され、また扇状地をはずれた低地部分からは、古代から近世にいたる水田址も検出され始めてきております。

今回調査の行われた二本柳遺跡はこのような地域に位置しており、付近には古刹法善寺を中心に加賀美の集落が形成されております。法善寺は鎌倉時代初頭この地域を治めた加賀美遠光の居館のあった所とされております。また法善寺に伝えられている、江戸時代後期に描かれたとされる「法善寺境内図」によると、かつて法善寺の周囲には20を越える子院があり、そのうちの一つに福寿院なる寺院があったとされております。この福寿院の一面に該当するとみられる場所に農道が建設されることになったことから、今回の発掘調査の運びとなった訳であります。なお調査区域は、すでに甲西バイパス建設に伴う発掘調査が行われ、戦国時代の遺物を伴う井戸跡や墓が検出されている「二本柳遺跡」に隣接していることから、それと繋がる同じ遺跡として、とらえたものであります。

調査の結果、溝や井戸跡、それに方形区画遺構などが発見されました。特に溝からは多くのかわけ・木製品・五輪塔や石臼等の石製品が出土しました。これらは伴出した陶磁器から16世紀後半の遺物と見られるものであります。特に溝からは卒塔婆が出土しており、五輪塔や香炉型土器等と合わせて、寺に関する遺物とみられるものであります。また僧侶の名前かと思われる文字が墨書されたかわらけも発見されておりますが、これらの遺物は「福寿院」の存在を裏付けるものとも言えましょう。その他18世紀以降の陶磁器も出土しており、一部には江戸時代の遺構も残されております。

また方形区画遺構が調査されましたが、これについては小区画の水田跡の可能性が考えられますが、また一方ではこの地域の特産ともいべき瓦生産に関する粘土探掘跡という見方も残されております。今回の調査は幅10m以内という非常に限られた範囲であることから結論を出すには至っておりません。今後の調査研究に期待されるところでもあります。いずれにしてもこれらの成果が今後の研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、調査にあたってご指導・ご協力を賜った関係機関各位、ならびに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1992年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

- 1 本報告書は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（富士川西部中央地区）に先立ち、山梨県埋蔵文化財センターが実施した中巨摩郡若草町加賀美字山宮地にある二本柳遺跡の発掘調査報告である。
- 2 本調査は、山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金を受け、実施したものである。
- 3 本書の執筆・編集は新津 健、五味信吾が行った。文責については文末に明記した。
- 4 遺物実測、トレース、図面整理は、名取洋子、高野真寿美、野中はるみ、望月和佳子、伊藤順子、渡辺征子の協力を得た。
- 5 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 6 出土品等については次の方々から御教示・分析をしていただいた。

陶 磁 器	小野 正敏氏（国立歴史民俗博物館）
土 器 類	河野真知郎氏（鶴見大学）
墨書土器ほか文字資料	平川 南氏（国立歴史民俗博物館）
石製品石質	河西 学氏（帝京大学山梨文化財研究所）
プラント・オパール分析	外山 秀一氏（ ” ” ）
- 7 福寿院関係の絵図や古文書、それに出土した卒塔婆や五輪塔については法善寺住職今村文匡氏にお世話になった。

凡 例

- 1 遺構・遺物挿図の縮尺は次のとおりである。

[遺構] 全体図 $\frac{1}{200}$ 、溝・方形区画遺構全体図 $\frac{1}{200}$ 、遺物出土状況 $\frac{1}{50}$

[遺物] 土器類・木製品 $\frac{1}{2}$ 、石製品 $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ 、金属製品 $\frac{1}{2}$ 、銭貨 $\frac{1}{2}$
- 2 遺構断面図中のレベルポイント部分にある数字は標高を表す。
- 3 遺物分布図中のマークの意味は次のとおりである。
 - △ 国産磁器
 - 国産陶器
 - ▲ 輸入陶磁器
 - ◆ 瓦
 - ★ 金属製品
 - 銭貨

『二本柳遺跡』 正誤表

訂正箇所		誤	正
ページ	行		
11	キャブシ ョン	天保13年(1824年)	天保13年(1842年)
12	17	来酉年 = 明治6年(1872年)	明治6年(1873年)
46	18	百姓ト替地いたし置候_	百姓ト替地いたし置候」

目 次

序	
例言・凡例	
第1章 調査の経過と概要	5
第1節 調査に至る経過	5
第2節 発掘調査の概要	5
第2章 地理的環境と沿革	8
第1節 遺跡の立地	8
第2節 福寿院の沿革	10
第3章 発見された遺構・遺物	15
1 溝	15
2 井戸	27
3 方形区画遺構	27
4 その他の遺物	32
第4章 遺物・遺構の検討	39
第1節 土器類について	39
第2節 遺構の時期と性格	41
第3節 福寿院について	44

挿 図 目 次

図 版 目 次

第1図 発掘区域図	第13図 茶釜型土器・播磨・他実測図	図版1 遺跡近景・全景
第2図 遺跡の位置	第14図 内耳土器・他実測図	図版2 1号溝
第3図 遺跡周辺図	第15図 木製品実測図	図版3 1号溝遺物・土層
第4図 法善寺と福寿院	第16図 銭貨・他	図版4 1号溝と方形区画
第5図 1号溝・2号溝・方形区画全形	第17図 陶器・金属製品	2号溝と方形区画
第6図 1号溝・方形区画と出土遺物①	第18図 方形区画(部分)と出土遺物実測図	図版5 方形区画遺物出土状況
第7図 1号溝・方形区画と出土遺物②	第19図 播磨・石臼実測図	図版6 方形区画
第8図 1号溝・方形区画と出土遺物③	第20図 五輪塔実測図①	図版7 陶磁器
第9図① 1号溝上層のかわらけ一括出土状況	第21図 五輪塔実測図②	図版8 かわらけ
第9図② 1号溝上層出土のかわらけ一括	第22図 福寿院の範囲	図版9 金属製品・土器類
第10図 かわらけ法量比較グラフ	付 図 全体図	図版10 石製品
第11図 かわらけ実測図		図版11 木製品・種子
第12図 かわらけ・他実測図		図版12 絵図・古文書

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経過

二本柳遺跡は山梨県中巨摩郡若草町加賀美字山宮地に位置している。1989年11月に山梨県農務部狭中土地改良事務所から県教育委員会文化課に、この地域における農道の新設についての事業計画が提出された。そこで文化課から依頼を受けた県埋蔵文化財センターでは、分布調査を実施したが当該地は水田地帯であったため遺跡の確認はできなかった。しかしこの一帯は中世に栄えた法善寺に隣接した地域であり、その子院の一つとされる「福寿院」なる寺院の一角にあたる可能性もあることから、11月30日に試掘を実施した。その結果溝および井戸跡が検出されるとともに、特に溝からは「かわらけ」や内耳土器等の土器類、曲物や下駄等を含む木製品が出土した。これらの遺物は戦国時代に属するものと考えられ、やはり法善寺ないし福寿院にかかわる中世の遺跡である可能性が高まった。

その成果に基づき、文化課・埋蔵文化財センター・耕地課・狭中土地改良事務所とで協議を行い、1991年度に発掘調査を実施する事となった。調査は山梨県埋蔵文化財センターにより同年10月1日から12月11日まで行われた。また、現地調査終了後整理作業が行われ、報告書作成に至った。[文化財保護法に基づく手続き]

- ・1991年(平成3年)9月24日 山梨県教育委員会教育長 発掘通知を文化庁長官宛提出
- ・1991年(平成3年)10月11日 文化庁より発掘通知の受理通知
- ・1992年(平成4年)1月9日 山梨県教育委員会教育長 遺物発見通知を小笠原警察署長宛提出

第2節 発掘調査の概要

(1) 発掘調査の経過

発掘調査は、試掘の成果や地形の観察、それに絵図資料等から判断して、道路工事の行われる区間のうちの長さ110mを対象とした(第1図)。

遺跡名については字名からすれば「山宮地」であるが、西に隣接する若草町十日市場字二本柳地区で建設省の事業である「甲西バイパス」建設に伴う発掘調査が行われており、ここからも戦国時代の遺跡が発見されていることから、両者繋がりをもった遺跡であると考え、同じ二本柳遺跡と称することとした。なお、法善寺所蔵の絵図では「福寿院」の範囲は今回の農道建設予定地内に限られており、甲西バイパス予定地までは及んでいない(図版12)。

調査方法については、発掘区内に一辺5mの方眼を南北方向にA・B2区、東西方向に1～22区設定し、全面的に調査を行った。但し、調査区内から排土を運び出さないため、順次土を移動して行く方法をとったため遺構の全景写真は撮れなかった。

遺跡の層序は、水田地帯のため表土（Ⅰ層）下に酸化層（Ⅱ層・水田床土）が発達しており、その下に砂や粘土を含む黒褐色土が堆積している。このⅡ層下部からⅢ層が遺物包含層である。以下、白色粘土層、黒色粘土層と続くがこれらの粘土層は基盤層であり、遺物は含まない。溝や方形区画遺構はこれらの粘土層を掘り込んで作られている（第5図）。したがって遺構の床ないし底面は粘土層にある。調査は遺構に影響のないⅡ層中位までは重機により排土し、以下人力により掘り下げ進めていった。

(2) 遺構・遺物の概要

調査により発見された遺構は次のとおりである。

・溝3基 ・井戸1基 ・方形区画遺構

これらの時期は3号溝を除き、戦国時代後半が中心となるものと思われる。また国産染付磁器の破片が出土する箇所もあり、江戸時代中期以降も機能していた部分があったと考えられる。3号溝は検出面が粘土層直上であること、覆土の砂層中から摩滅した平安時代の土器片が出土したことなどから中世以前の可能性が高い。

溝やその周辺を中心に、多くのかかわりけを始めとして、内耳土器、播鉢ほか日常雑器、石臼、石製播鉢等が出土した。また、青磁・白磁などの中国磁器、瀬戸・美濃系陶器等の破片、鉄砲の鉛玉、斧、銭貨もみられる。他に漆塗り椀や曲物、板、棒、紡錘車などの木製品や、卒塔婆・五輪塔などに関する出土品もある。さらに1号溝からは桃・梅・クルミ・ウリ類・ヒョウタン等の種子や堅果類が出土し、当時の生活が偲ばれる。

（新津 健）

(3) 調査組織および協力者

調査主体 山梨県教育委員会

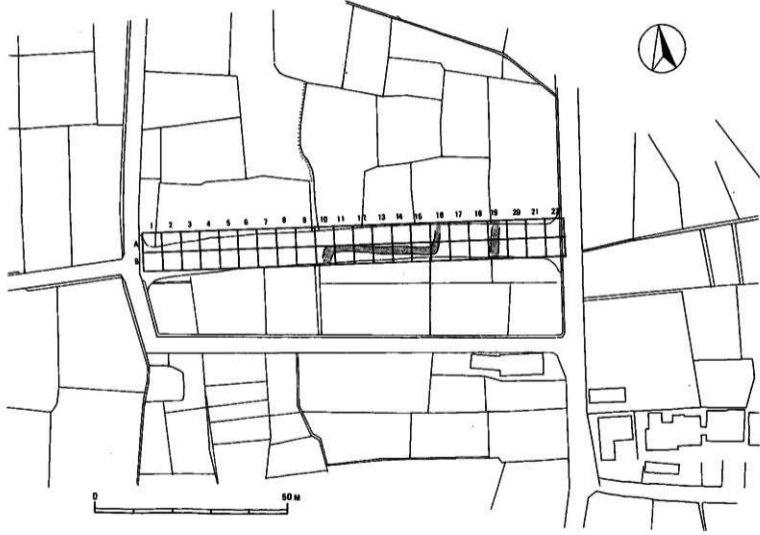
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 新津 健（山梨県埋蔵文化財センター副主査・文化財主事）

五味信吾（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

作業員・整理員 河西たつ子、大芝美代、河西武子、塩田則子、小池純子、小池なつ江、加藤きぬ子、海野長雄、海野かね子、鈴木福子、末木みづほ、佐久間篤子、斉藤利男、斉藤直江、折居きく、秋山とみ、武藤孝子、米山八重子、土屋ふじ子、小林としみ、長田美和子、長田富子、長田奈代子、平美与枝、鯉淵滝三郎、富永 明、宮坂晴幸、矢崎米子、渡辺貞子、秋山満洲朗

協力者・機関 山梨県農務部耕地理課、同県中土地改良事務所、若草町教育委員会、若草町役場、若草町加賀美地区、帝京大学山梨文化財研究所、法善寺村文匠



第1图 发掘区域图 (1:500)

第2章 地理的環境と沿革

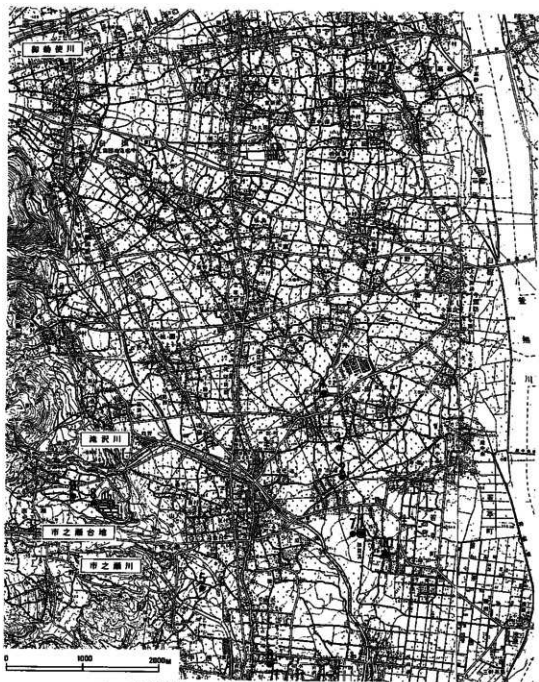
第1節 遺跡の立地

二本柳遺跡(第2図①)は、甲府盆地の西部、釜無川の右岸に位置し、標高は260mを測る。遺跡のある若草町より北西には、日本最大の扇状地である御勅使川扇状地が西から東に広がり、川の氾濫によって運ばれた土砂が広範囲にわたって厚く堆積している。これより南にも御勅使川扇状地と並列したような形で、滝沢川や市之瀬川による扇状地が形成されている。これらの扇状地の扇端部にあたる地域には水量の豊富な湧水帯が存在し、さらに外側には沖積低地が広がる。現在は水田から果樹園への稲作転換が進んでいるが、それ以前の耕地利用はこの湧水帯を境に畑と水田がはっきりわかれていた。沖積低地には川の氾濫によって礫層と粘土層が何重も堆積しているが、この礫層を通して水が大量に流れているため、一年を通して水が豊富な半面、水害も起き易い地域であった。二本柳遺跡は沖積低地の中の微高地に存在しているため、礫層はなく比較的安定している。現在、調査区周辺は水田や果樹園となっている。

二本柳遺跡の周辺の遺跡について考えると、先土器時代については本遺跡の西に位置する市之瀬台地上で見つかっているのみである。縄文時代には市之瀬台地のほか山間地、山との間の緩斜面にも集落が形成された。弥生時代になり稲作が行われるようになると、御勅使川扇状地や滝沢川・市之瀬川扇状地の扇端部にも集落が形成されるが、縄文時代と同じく台地・山間地・緩斜面にも集落が存在する。古墳時代以降、集落は扇端部の湧水帯に広がっていく。甲西バイパス建設に伴う発掘調査や事前の試掘調査の結果、湧水帯にあたる新居道下遺跡(奈良～平安

第2図②)、村前東遺跡(古墳～平安 第2図③)では大規模な集落の跡が確認された。また、ノ木遺跡(縄文・古墳～平安 第2図⑤)、住吉遺跡(弥生・中世 第2図⑥)なども湧水帯付近に位置する。一方、十五所遺跡(古墳 第2図④)のように扇状地内でも比較的安定したところでは集落が形成されたことが明らかになった。こうした集落のなかにはのちの氾濫による土砂のため削られてしまったものもあると考えられる。甲西バイパス建設に伴う二本柳遺跡(第2図⑦)は沖積低地に所在し、中・近世の水田跡をはじめ中世の井戸、墓の跡などが検出された。また、やはり甲西バイパス建設に伴う試掘調査において、これより南の甲西町でも中・近世の遺跡の存在が確認されている。今回、発掘調査の行われた二本柳遺跡は、後述する絵図や文献、伝承から中・近世にわたって繁栄した「福寿院」という寺院の跡であると推定された。

(五味信吾)



- | | | |
|------------------------|-----------|-----------|
| 1. 二本柳遺跡 | 2. 新居道下遺跡 | 3. 村前東A遺跡 |
| 4. 十五所遺跡 | 5. ㄈ木遺跡 | 6. 住吉遺跡 |
| 7. 二本柳遺跡 (甲西バイパス建設予定地) | 8. 六科丘遺跡 | |
| 9. 長田口遺跡 | 10. 法善寺 | |

第2図 遺跡の位置 (1/50,000)



第3図 遺跡周辺図 (1/5,000)

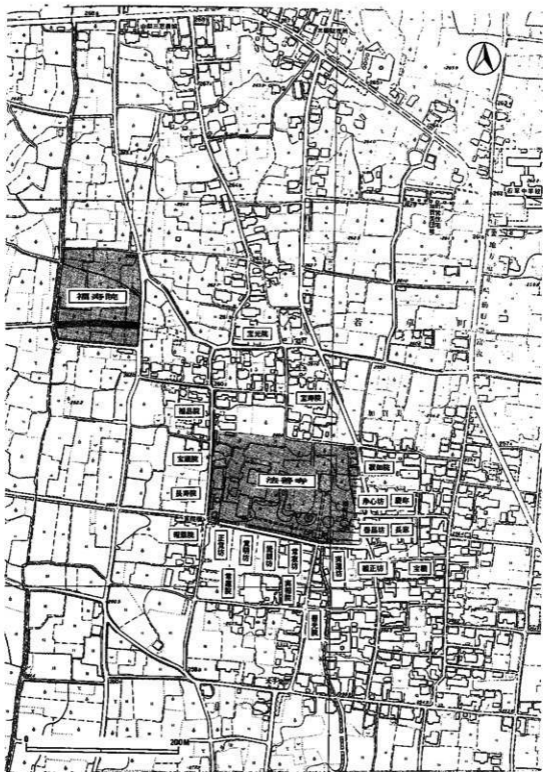
第2節 福寿院の沿革

若草町加賀美に所在する法善寺は真言宗の寺院であるが、古くは鎌倉時代初頭この地域を治めた甲斐源氏の加賀美遠光の居館のあった所とされ、現在も寺の周囲、南・西には堀が残っている。遠光の孫遠経は居館の跡を寺院とし、伽藍の整備を行ったと伝えられる。また、福寿院をはじめとする塔頭が法善寺の周囲につくられ、その数は二十余りを数えたといわれる。法善寺は甲斐國の守護、武田家との関係も深く、武田八幡宮(並崎市)の別当も兼ね、中・近世を通じて繁栄した。

法善寺の塔頭のうち福寿院はとりわけ規模が大きく、また格式も高く、法善寺に迫る勢いがあったとされている。しかし、はっきりした創建年代は不明であり、福寿院の存在が明確にわかるのは戦国時代からである。法善寺に伝わる武田信玄から福寿院に宛てた2通の文書から、武田家との関係も深く、祈願の寺として位置づけられていたことがわかる。

『武田家印判状』

永禄12年(1569年)、駿河攻めに成功した信玄が、福寿院に対して前年の夏以来の法華経読經によるものとして、税の免除を許可するという内容である。



第4図 法善寺と福寿院 (1/5,000)

天保13年(1824年)の『法善寺境内図』をもとに作成

【武田信玄祈願文】

元亀3年(1572年)、上洛をめざす信玄が、福寿院と普門院に対して越後の上杉軍が信濃・上野の2国に兵を動かさず、大願成就するように法華經百部を誦経し、飯縄大明神に献上することを命じたものである。この翌年、信玄は京を目指して侵攻の途上、病死する。

武田家滅亡後の福寿院については慶長6年(1601年)の「加賀美村御縄打屋敷帳」で知ることができる。この文書では村人の耕地についての記載の後に法善寺の塔頭に関して列記されているが、福寿院は「四拾宅間 三拾五間 千四百三拾五坪」で法善寺の「四拾六間 十四間 九百廿四坪 式百八拾歩入」を上回る規模であったようである。

その後、文化11年(1814年)の『甲斐国志』では、福寿院などいくつかの塔頭はその存在がうかがいしれるものの、半分以上の塔頭は「今亡」と記載され存在していなかったらしい。

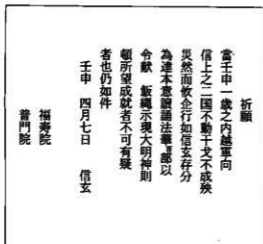
天保13年(1842年)の『法善寺境内図』(図版12)は福寿院の僧運海によって法善寺と塔頭の様子が描かれたものである。福寿院については建物、池、樹木が表現されている。ただし、『甲斐国志』で「今亡」とされている寺院も表記されている点に注意しなければならない。

慶応4年(1868年)の『甲斐国社記・寺記』には福寿院について「滅罪取次寺ニ付拙僧住職之御節議定いたし来酉年迄ニ場所替再建可仕門末檀家連印いたし置候右寺内之儀先年より田形ニ相成候」と法善寺の僧雲教によって記されている。つまり、江戸時代末期には福寿院は廃寺となり跡地は田に変わってしまったため、檀家の合議によって来酉年=明治6年(1872年)までに再建することが企てられたものの実現しなかった。なお、法善寺の塔頭で現在も残っているのは寂如院のみである。

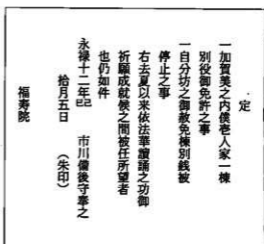
福寿院の寺域については、さきの天保13年の絵図と現況図の比較から、四方を道路に囲まれた一辺110~120mの長方形の範囲と推定できる(第4図)。ただし、これはあくまでも江戸時代後期の寺域であり、それ以前の寺域が同じ範囲であったかはわからない。

今回、発掘調査の対象になったのは、第3図のように推定寺域の中央よりやや南の箇所である。

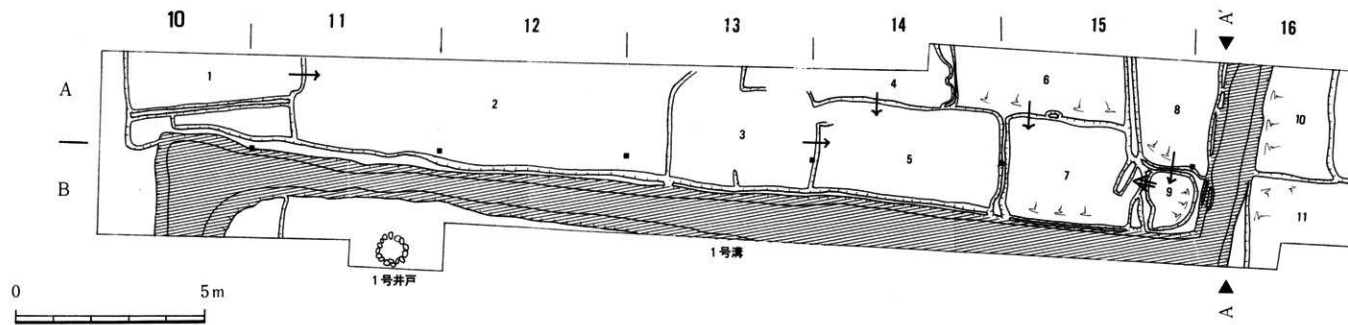
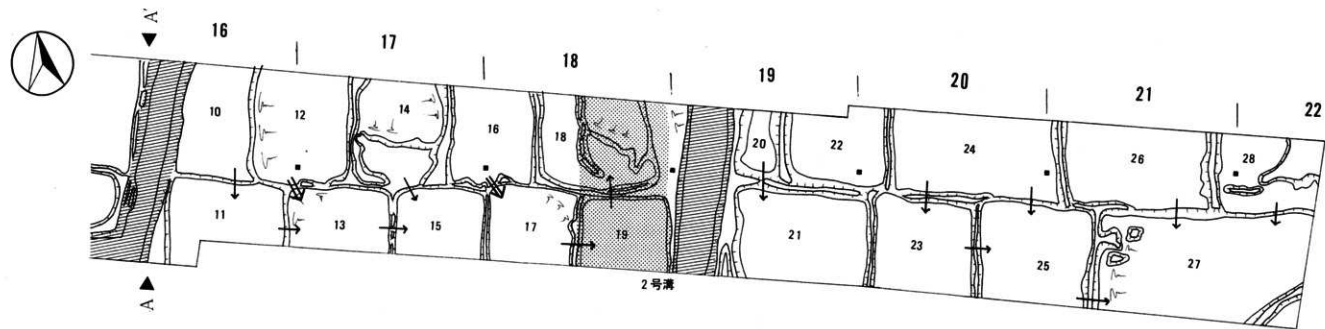
(五味信吾)



【武田信玄祈願文】



【武田家印判状】



第5图 1号溝・2号溝・方形区画全形 (1/100)

第3章 発見された遺構・遺物

第1章で述べたとおり、本遺跡からは溝・井戸・方形区画遺構等が発見され、さらにそれらの遺構の内外から多くの遺物が出土した。以下これらについて記述していく。

1 溝

①1号溝（第6図～第8図）

10～16区に位置する。溝は調査区の南よりを東西に長く29mにわたって流れ、東端ではほぼ直角に北に延び、また西端では丸味を帯びて南に屈曲する。これらの屈曲部はさらに調査区外に延びると考えられ、東3.5m、西6.5mのみが検出された。13～16区では調査区の外に出てしまうため溝の南壁は確認できなかった。したがって、東端については北に延びることはわかっているものの南にも延びるのか、あるいは西端のようにかぎ型になるのかはわからない。幅は最も広い西側の屈曲部で2m、最も狭いところで1mを測る。深さはおよそ50cm前後で、底から壁にかけての断面形状は「U」字形を呈す。溝内には水分を多く含んだ黒色土が堆積し、ところによっては木の葉や枝、ひょうたんの実や種、梅・桃・瓜の種子などが集中して検出された。溝の底付近では薄い砂層が確認された。出土した遺物については土器、陶器のほか漆器、木製品が多く、これらの遺物から1号溝は16世紀のものとして推定される。遺跡付近の地形は北西から南東に向かって緩やかに傾斜していることから西から東、北から南の方向への流れが推定できる。

（五味信吾）

〔出土遺物〕

陶磁器（図版7-1）

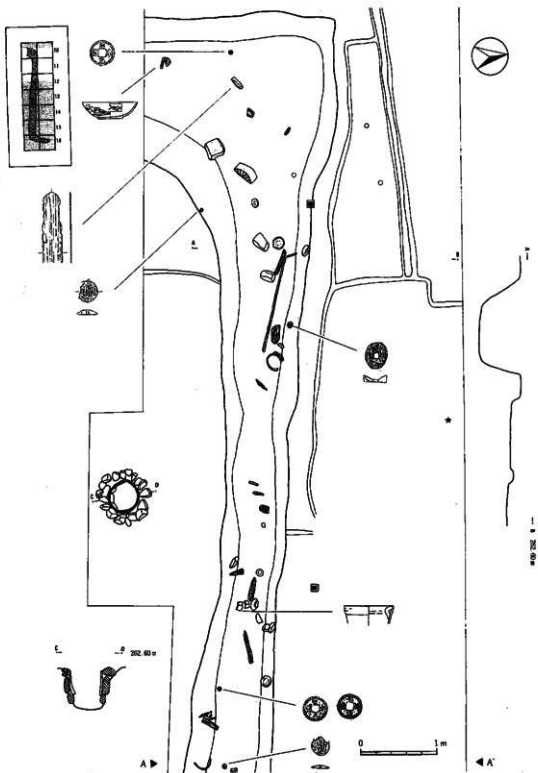
数は少ないが覆土上層および底面付近から出土している。5は溝西端近くのコーナー付近の底面直上から出土した灰釉陶器の底部破片。大煮系の皿と思われる破片である。7も灰釉皿の口縁部破片。1号溝14区の覆土中位から出土したもの。他はいずれも覆土上層から出土した破片。3・4は青磁破片。4は13～14世紀前半、2は15世紀頃のものであろう。1は白磁皿破片で16世紀代と見られている。9は志野系盤の口縁部破片である。

かわらけ（第9図1～15、第11図1～46、第12図）

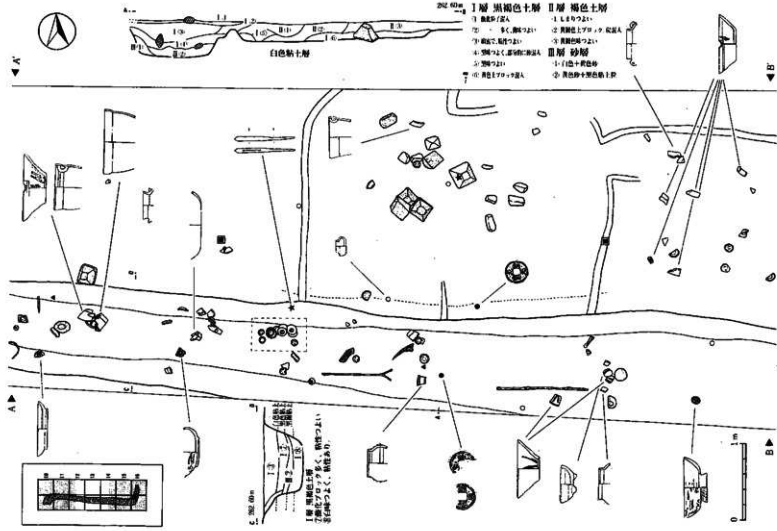
覆土中を中心に多くのかかわらけが出土した。小破片を含めれば相当量であるが、口縁部を残す以上の破片について図示した。法量や出土層位等については表2にまとめてある。まず法量については、本遺跡出土品全体の口径・底径・器高をグラフにおとしたものが第10図であるが、これによると次の三つのグループにまとまる傾向がとらえられる。

①口径7.2～8.9cm・底径4.0～5.1cm・器高1.4～2.7cm

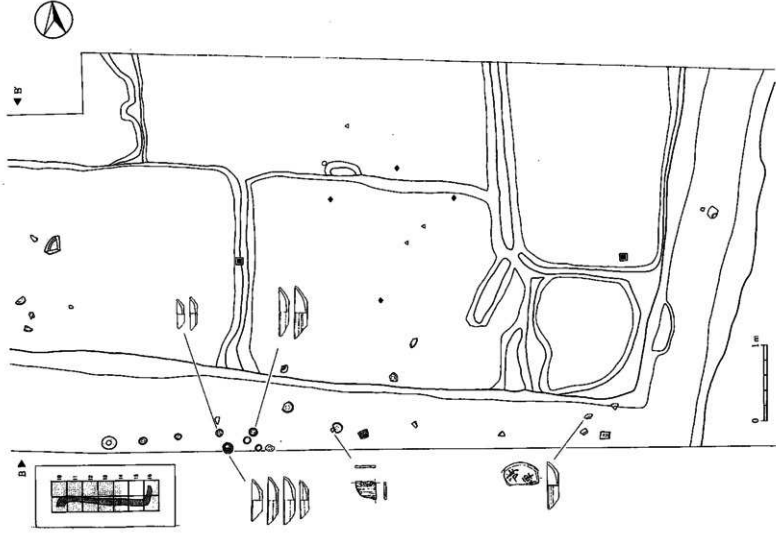
②口径9.2～11.6cm・底径4.4～6.3cm・器高1.8～3.0cm



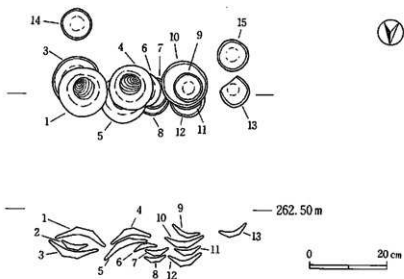
第6図 1号溝・方形区画と出土遺物① (1/50)



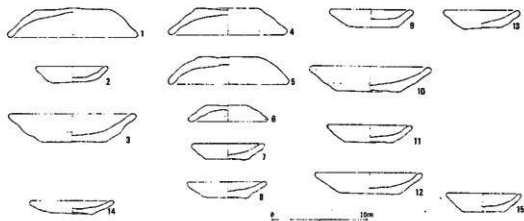
第7図 1号溝・方形区画と出土遺物② (1/50)



第8图 1号溝・方形区画と出土遺物③(1/50)



第9図① 1号溝上層のかわらけ一括出土状況 (1/10)



第9図② 1号溝上層出土のかわらけ一括 (1/4)

③口径11.7~13.9cm・底径5.8~8.0cm・器高2.2~3.3cm

このような大中小3種から「かわらけ」が構成されていることがわかる。第9図に示した溝上層から一括出土した15個体についても、①9個・②1個・③5個という組み合わせになっている。図示した1号溝出土の「かわらけ」のうち、1~17が①の小型、18~30が②の中型、31~46が③の大型である。胎土については、粒子の細かい緻密なものと同石や雲母状の粒子や砂粒を多く含むザラツキの強いものがあり、さらにそれらの中間タイプも認められる。緻密な胎土のものは多くが白味のつよい褐色を呈しており、小型品に多い傾向が窺われる。

なお色調や胎土それに成形からみて共通した個体群がみられる。第11図15・16は緻密で白味

の強い色調。同一地点から一括出土した4個体のうち、19・27はやや薄手で赤味のある色調、33・37は類似した器形を呈している。また第9図にしめした15個体のうち小型品である6～8・13・14の5個体は混入する白色粒子の状況や色調がよく似ており、大型品である1・3は色調や成形が類似している。

底部には殆どの個体に糸切り痕が明瞭であるが、23は糸切り後に丸底風に整形されている。また第12図25は糸切り後に粗割りの板状のものの上に置いたかのような跡が残っている。内面中央部には指で押ナデしたような調整跡が認められる。同図22・23は1/2程の破片であるが、内面に墨書が認められる。22は内面に2字「圓」「雄(?)」、外面に2字「法」「圓」であろうか。23は「常」「禪」の二字が確認できる。

煤が付着しており燈明皿として使われたとみられるものもある。第11図4・9・10・20・31・45であるが、特に5と9は内外面とも炭化物の付着が著しい。大中小ともに利用されている。

これらの出土位置については、溝上層が37、中層13、下層(底面付近)3と上層からの出土が圧倒的に多い。溝の埋没過程あるいは埋没後に捨てられたものが多いことにならうか。これらの中には、まとめて出土したものもある。すでに述べた第11図19・27・33・37の4点や第9図の15点などである。特に15点については大中小セットでいくつか重なった状態にあり、単なる廃棄以外の状況も考える必要があろう。

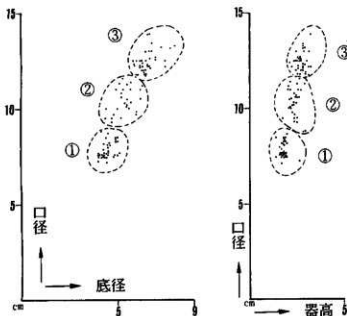
小型土器(第12図18～21)

18は小型のかわらけとみられる破片であるが、上述したものとは異なった非常に浅いタイプで、轆轤成形後にへうで削られて丸底状になっており、糸切りは完全に消去されている。19・

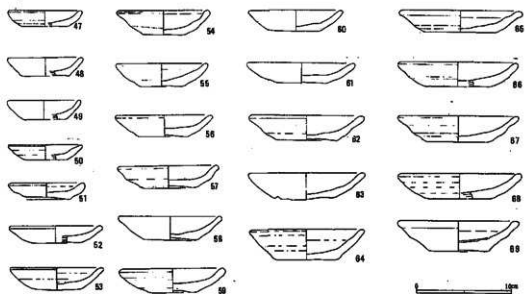
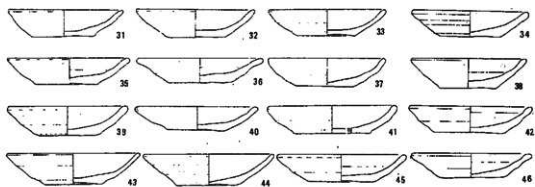
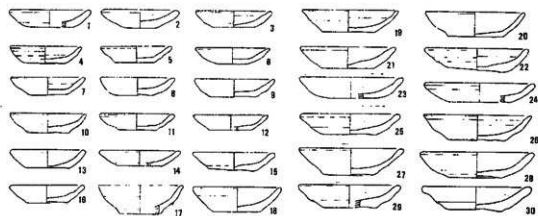
20・21は香炉型の土器である。20は口縁部の破片。19には印花文がみられる。21は溝上層から出土したもので、三脚香炉である。

その他の土器

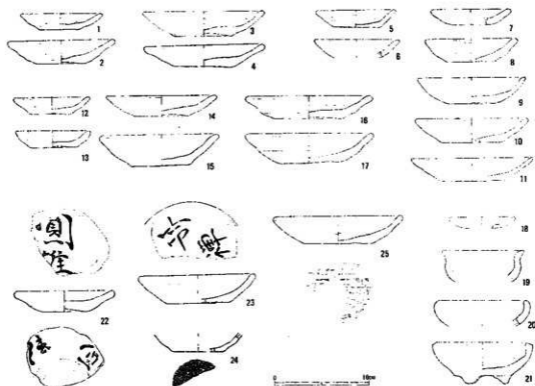
第13図1～5は茶釜型土器ないしそれに類似した器種。いずれも口縁部を中心とした破片で、肩部に耳ないし把手状の突起がつけられている。特に2・3は耳が一对付くものと思われる。2は耳の下に受け状の突起が張り付けられている。いずれも口縁部の立ち上がりは短い。1は口縁が外傾するが、同様の土器であろう。4・5はさらに口縁が短く、肩部もゆるやかな器形の土器である。2・3とは器形が異なるが、この項目に



第10図 かわらけ法量比較グラフ



第11図 かわらけ実測図(4)



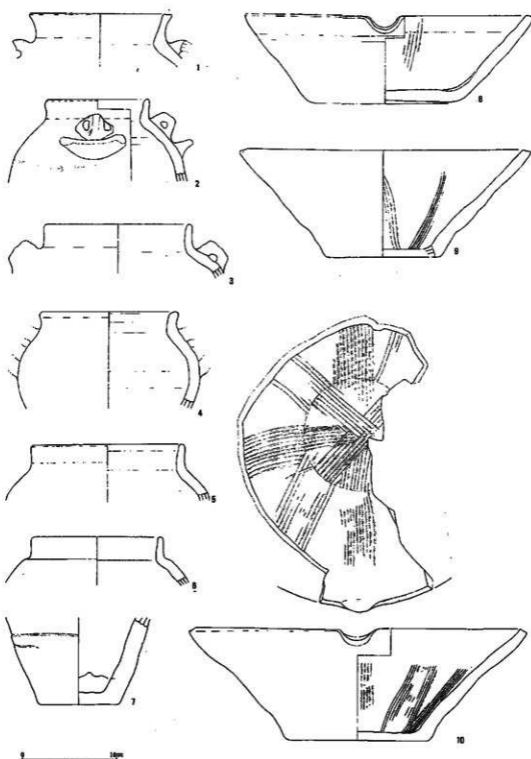
第12図 かわらけ・他実測図(1/4)

入れておいた。4には耳状突起が割れた跡がある。5も同種のものであろう。これらはいずれも溝渚土から出土したもので、特に1・4・5は上層である。

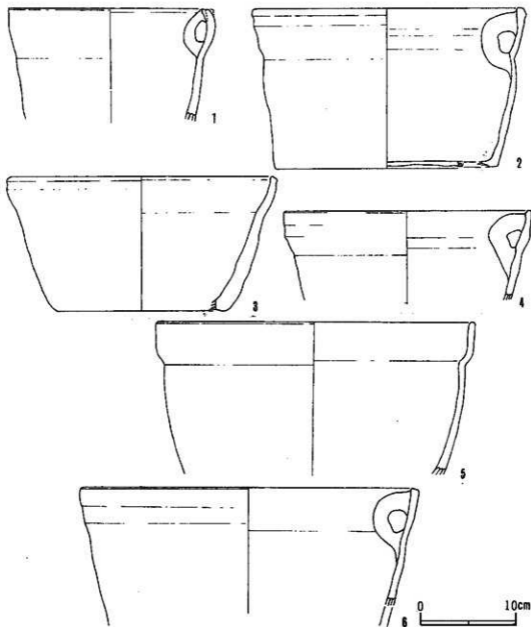
第13図7は三筋壺の下部。第13図9・10は播鉢。いずれも土師質で特に9はあまり堅くはない。10は片口部分が残っており、外面には全体に煤が付着している。この10は内耳土器第14図2・5とともに覆土中位から出土したものである。内耳土器は小破片が多く出土したが、2・4・5・6の4点を図示した。2は半欠品であるが、外面は口縁部にいたるまで煤が付着している。

木製品(第15図1~19)

1・2は木製紡錘車。1は直径4.6cm、2は5.5cm。3は用途不明の有孔円盤。4~7は漆製品。4は皿で、焼けている。他は碗である。内面赤、外面黒漆をベースに赤で文様が描かれている。9は底部外面に赤による3点がみられる。11は箸、12~14・20は貫通孔のある製品であるが、12と14は組み合わせる可能性がある。16は板。17は折敷であろうか。18は溝西コーナー付近の底部近くから出土した卒塔婆破片。表裏に文字が書かれている。法善寺住職今村文匡氏の解説によると、表面は上から五輪塔の空風火水地をあらわす梵字「キャ」「カ」「ラ」「バ」「ア」が書かれており、以下は不明瞭ながら薬師如来を意味する種子「べー」、そして帰依という意味の「ウン」が記されている可能性が強いとのことである。これより下部は残念ながら欠損しているが、本来は戒名が書かれるとのことである。なお如来や菩薩などの種子は、初七日や三十三回忌などの供養年時を意味するものであり、ここに書かれた薬師如来は四十九日を



第13图 茶釜型土器・摺鉢・他実測図 (1/4)

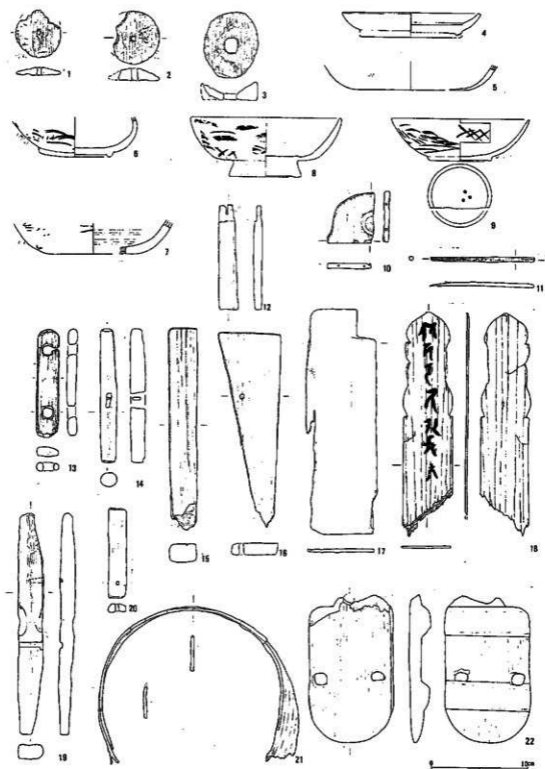


第14図 内耳土器・他実測図(1/4)

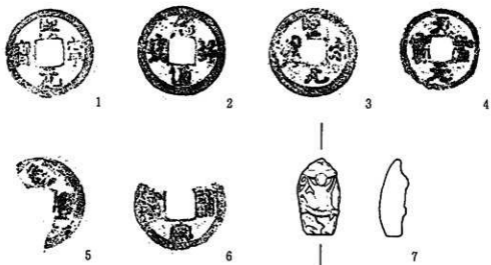
あらかずものとされる。従ってこの卒塔婆は四十九日の法要に用いられたものとのことである。裏面は不鮮明で解読不能であるが、通常上部に梵字、下部に偏文が記されるとのことである。19は中央部分が摩滅し窪んでいるもの。21は曲物。直径20cm程度の小型品か。22は先端部の欠けた下駄。よく使われており歯の摩滅は著しい。これらの出土層位は、2が壁際上部、5・7・19が上層、8～10・12～17・20～22が中位、11および18が下層である。

金属製品

銭貨(第16図1～3・5・6)



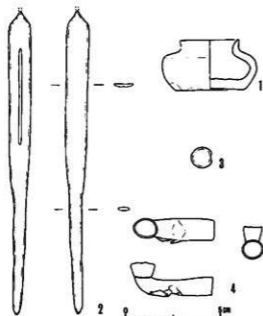
第15図 木製品実測図 (1/4)



第16図 銭貨・他 (1/2)

1は覆土中位から出土した「熙寧元寶」、2は「元祐通寶」、3は「聖宋元寶」、5は「(元)豊(通)(寶)」、6は「(皇)宋通寶」である。いずれも覆土中位からの出土。

弁(第17図2) 溝の北壁付近からの出土であるが、レベルは覆土最上層であり、溝埋没後のものかもしれず、13区上層で出土した鉛玉や鉄軸小壺などと同じ面の遺物とすべきかもしれない。耳掻部分を欠損するが、胴部には浅い溝が認められるものである。



第17図 陶器・金属製品 (1/2)

石製品(第19図1~5・7、第20図3・8)

1~5は摺臼と思われる石製品。内面が摺鉢状に窪み、特に3や5は摩滅している。5を除き底面は丸底状であるが、5は平ない僅かに窪んだ状態である。いずれも安山岩製。7は溝の西コーナー付近の覆土最上層から出土した石臼破片。方形区画5から出土した8と接合。本来は8分割6溝の上臼であったものか。側面に挽木用の孔が穿たれている。安山岩製。第20図3は覆土上層から出土した火輪。安山岩製で上部に柄穴がある。8は中層出土の水輪(ダイヤイト)。

(新津 健)

② 2号溝 (第5図)

2号溝は19区に位置し、南北に走る。今回確認できたのは、調査区内の長さ4.5mの範囲のみであるが、さらに調査区外の南・北に延び、北から南に向かって流れていたと推定される。幅は1.3m、深さはおよそ50cm前後で一定しており、断面の形状は「U」字形を呈す。出土遺物から1号溝と同様、16世紀のものと推定される。(五味信吾)

[出土遺物]

陶磁器 (図版7-1)

2は青磁破片で西壁の上部から出土。他に覆土から出土した常滑の甕とみられる小破片がある。

かわらけ (第12図5~11)

5~7は①小型、8~10は②中型、11は③大型である。5と8は溝西壁付近から出土したものの。他は覆土中から出土。11の内面には少量ながら煤が付着しており、燈明皿として用いられたものである。(新津 健)

③ 3号溝 (第5図)

3号溝は9区に位置し、南北に走る非常に浅い溝である。2号溝と同様に調査区外の南・北に延びるものと思われる。幅は80cm程度であるが一定せず、溝内には砂のみが堆積しており、出土した遺物は平安時代以前のものと思われる土器片が数点のみである。流れは北から南の方向であったと推定される。(五味信吾)

2 井 戸 (第6図)

試掘の際に確認されていたものである。B-11区に位置し、1号溝の南側1mにある。底部で直径40cm、上部で60cm程の円形の掘り込みに偏平な円礫を巡らせ、その内側下部に桶を入れ、さらに上部には曲物を重ねている。深さは55cmであるが、この検出面は1号溝の検出面とほぼ同じであることから、井戸上面にはもっと石が積まれていた可能性もある。浅いが調査時にも出水は多かった。遺物なし。

3 方形区画遺構

発掘区の東半分にあたる10区から22区にて方形に区画された遺構が発見された。これらはあたかも小区画水田のような形態を備えているものであり、全体としては28区画から構成されている(第5図)。各区画は粘土による土手状の高まりにより区切られており、西から1~28まで番号をつけた。1~3まではやや不明瞭であるが、4以降は東西ラインを基準に整然と並んでいる。この発掘区のほぼ中央を東西に走るラインを境に、北側の区画(偶数番号)と南側の区画(奇数番号)とは交互に並ぶ状況である。また、これらの区画の設定にあたっては1号溝

が意識されていたようで、特に1～3・5・7・9の南側土手と8・9の東側土手は溝に沿って走っていることから理解される。以下これらの区画について記述する。

【規模】 1辺2.4～3.0mの方形ないし長方形を呈するものが多い。長軸が4m以上の規模の大きいものもみられる(5・6・24・26・27)が、9のように1.6×1.4mという小型で丸味の強い形状のものや幅1m程度の20のような例もある。

【底面】 地山の白色粘土ないし青色粘土面で平坦。但し14・18・27・28では傾斜する部分がある。区画により底面のレベルが異なっており、全体としては西から東・北から南へと低くなる傾向が認められる。第5図に示した矢印は高い方から低い方へ方向である。このレベル差については表1に示したとおりであるが、20cm以上の差のある箇所もみられる。但しこれは底面の高さであって、区画を仕切る土手の高さは考慮していない。なお、高い位置にある10には土手はみられない。

表1 方形区画レベル差一覧(単位cm)

区画	レベル差	区画	レベル差	区画	レベル差	区画	レベル差	区画	レベル差
1→2	4	3→5	10	4→5	8	6→7	9	8→9	4
9→7	13	10→11	22	10→12	23	11→13	17	12→13	9
13→15	3	14→18	9	16→17	2	17→19	7	19→18	3
20→21	3	24→23	9	23→25	6	24→25	19	25→27	4
26→27	34	28→27	30						

【土手】 各区画を仕切っているのは土手である。これは白色粘土ないし青色粘土で作られているが、これには地山の粘土を掘り残したものと、貼り付けたものとの二種が認められた。多くは10～15cmの高さに掘り残したものが多いが、13・15間、15・16間(一部)、18内の土手等は貼りつけられたものである。また6・8間および7・9間の土手は36cmもある高いものであるが、下部23cmは掘り残し粘土、上部13cmが貼りつけ粘土という構造である。22・24間も20cm以上の高さであるがこれは全て掘り残し粘土である。幅は15～30cmである。

なお19内には白色粘土が厚く堆積していたが、これは18内の小土手から2号溝西壁付近にまで延びており、ここに方形区画を埋めて土手が築かれていたことが分かる(第5図18・19内スクリーン部分)。この土手は大きく、最大箇所高さ50cm・幅1.9mを測るものである。2号溝と関係のあるものであろうか。

【その他の施設】 9・7、12・13、16・17間の一部には土手が切れている、あるいは低くなっている部分が認められた(第5図中の⇒印)。土手を畦畔とすれば、このような施設を「水口」とみなすこともできようか。

【出土遺物】

①13区上面(方形区画3上層)

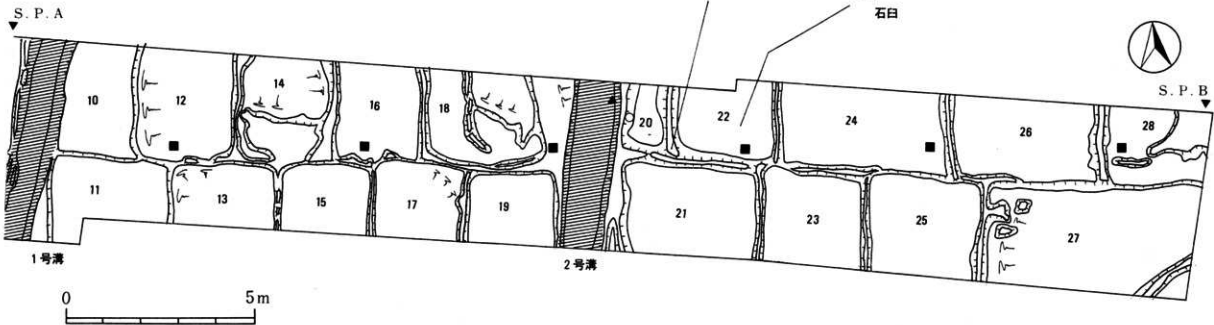
陶磁器(図版7)

S. P. A 263.00m

S. P. B



- 注記：
◎埋土土（木田原土を流石、埋入しませりあり）
◎埋土土（砂・粘土中埋入、遺物付片等）
◎埋土土（河原砂土がフロッツ埋入）
◎埋土土（砂・中層・埋入）
◎埋土土（粘土少量、埋入）
◎埋土土（粘土中埋入）
◎埋土土（河原土がフロッツ埋入）
◎埋土土（砂埋入）
◎埋土土（砂・粘土中埋入、遺物付片等）



第18図 方形区画（部分）と出土遺物地点図（ $\frac{1}{100}$ ）

方形区画3の底面より25cm程上面から鉛玉・弁・小壺などの遺物がある程度の広がりをもって出土している。堅緻な生活面としてとらえられたわけではないが、1号溝との関わりをなかで重要な意味があると思われる、ここで触れておく。第17図は鉄軸の施された小壺である。口径3cm、高さ2.6cmを測る完形品である。瀬戸・美濃系の16世紀代のものである。図版7-1-11は鉄軸の縁軸小皿の口縁部破片。図版7-2-13は灰釉碗の底部破片で鉛玉の付近のやや上部から出土したもの。これらは時期的には二つのグループにまとまるもので、まず第17図の小壺は16世紀後半に位置付けられるもので、図版7-1-6と11とは江戸中期（18世紀頃）の可能性があろう。

金属製品（第17図3）

鉛玉である。底面より25cm程上層から出土。

②方形区画3・5

かわらけ（第11図47～68、第12図13・15）

①小型5点（47～51）、②中型10点（52～61）、③大型9点（62～69、第12図5）である。この方形区画3・5は発掘区の13・14区にあたり、上層には前述した鉛玉・弁（1号溝）・鉄軸小壺などが出土した面があり、それ以下25cmで底面となっている。この底面ないし直上に五輪塔が散在しているが、これらと同一レベルあるいはその付近から出土しているものもある。特に53・59・60・64・68は底面あるいは直上から出土したものである。また、55・57は6cm程度、54・58・65・67は10～14cm、61は20cm程浮いて出土している。63は土手に張り付いた状態で出土。

57・63・68は内面に煤が付着。48は内面に熔融物が付着するとともに器壁も熱を受けていることから、この土器で金属を溶かしたと思われる。

第11図50・51・54～57・59・62～64が方形区画3、同47～49・52・53・55・58・60・65～69・第12図13・15は方形区画5から出土。

その他の土器（第13図6・8、第14図1・3・6）

第13図6は小破片ではあるが2・3同様の茶釜型土器の破片と思われるもの。8は土師質の摺鉢。2×1.5mの範囲に散布した10数片が接合したものである。レベル的にも底面から覆土まで10cm程の範囲がある。片口で浅い器形。内面はよく使用され摩滅激しく、特に底部周辺は窪んでいる。摩滅してはいるが摺溝は7本である。底外面には灰や炭化物が付着。以上は方形区画5から出土。第14図1は五輪塔近くの底面直上から出土した内耳土器。耳が口唇内面からつけられている。他の内耳土器の耳断面が縦長なのに対して、これは扁平な断面形状である。3は瓦質の鉢。底面は火熱を受けたように赤化している。

金属製品

銭貨（第16図4）は方形区画3の畦畔状の土手部分から出土したもので、「天聖元寶」であるが、直径2.1cmと一回り小さく質もよくない。

石製品

第19図8は上白の瓦破片で方形区画5の覆土から出土。1号溝覆土上部から出土した7と接合する。安山岩製。方形区画3からは五輪塔の部材が6個体まとまって出土した。火輪（第20図2・5・7）、水輪（第21図1）、地輪（3・5）がある。第20図2・7・第21図1は底面から出土し、ほかは5～20cm浮いて出土。石質は灰色安山岩（第20図4・7・第21図1・5）、デイスait（第20図2・11・第21図3）である。火輪の多くが屋根の高さ3～4cmであるのに対して、7は10cmと高い。第21図1の水輪には4面に一字ずつ梵字が墨書されている。今村文匡住職によると4面にはそれぞれ東西南北を意味する梵字が記されており、比較的鮮明な図示した面は「バク」で東を意味するとのことである。また地輪5にも4面に墨書されており、正面には南を表す梵字「ア」を中心に漢字が4字ほど書かれている。

③方形区画7

陶磁器（図版7）

中央部北よりに陶磁器片がやや集中する。図版7-2-6は国産染め付け碗の底部破片。5も碗の口縁部破片。8は蕎麦猪口と思われる染め付け片。図版7-1-10は鉄軸天目茶碗破片。これらは遺構底より20～30cm浮いて出土したものである。これらの陶磁器は江戸中期の18世紀後半であろう。

かわらけ（第12図12・14・16・17）

12は小型、14が中型、16・17は大型。12は白味の強い緻密な胎土の土器で、1や第11図15・16によく似ている。17は7区画ばかりでなく5区画も含め散在していた20点あまりの破片が接合し、ほぼ完形になったもの。12は上層出土。

④その他の方形区画からの出土遺物

1区画

陶磁器（図版7-1-8）は底面より15cm程浮いて出土した大窯系天目茶碗の口縁部破片である。他に尾呂茶碗系の破片と思われるものがある。27cmばかり浮いて出土。

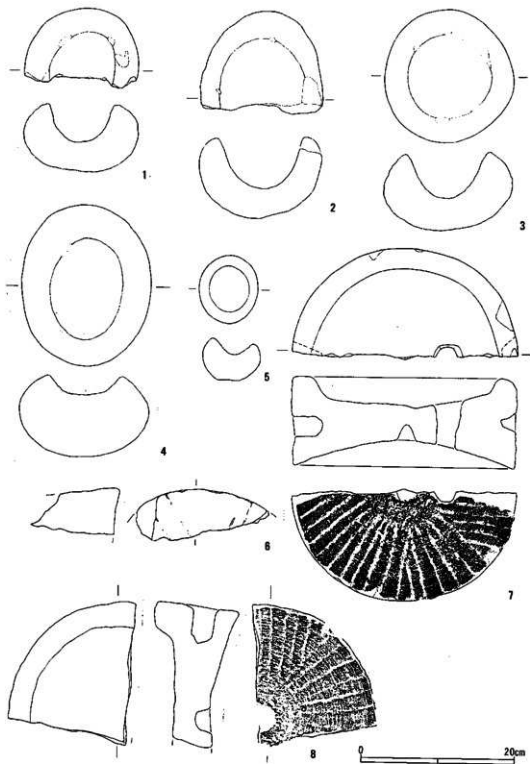
2区画

畦畔状の土手際から五輪塔火輪（第20図4）が、西側の覆土中からは第21図9の水輪が出土。4がデイスait、9が玄武岩。また中央部北端の上層からは第17図4の煙管が出土。他の区画では17から少量の陶磁器破片、20・21・22区画の交差する土手上部から安山岩製の空風輪（第20図1）が出土している。また22区画からは安山岩製石臼の上白破片（第19図6）が出土。

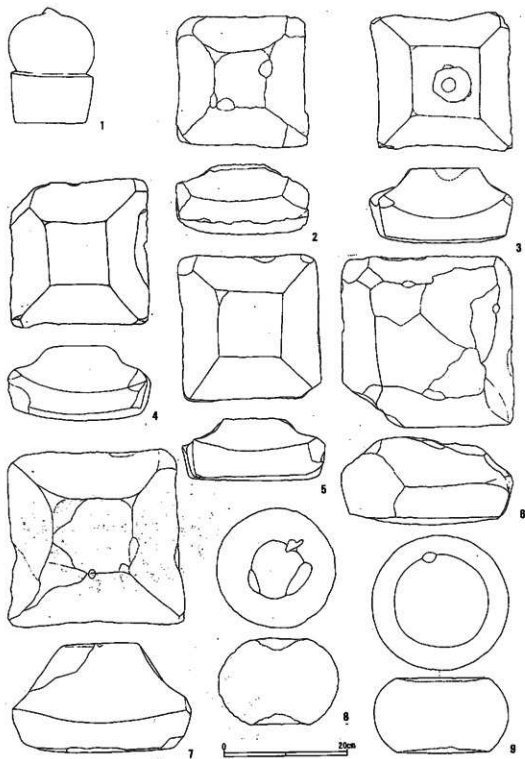
4 その他の遺物

第16図7は型で作り出した土製品。人の姿が作り出されている素焼きのもの。メンコあるいはお守り模のものか。

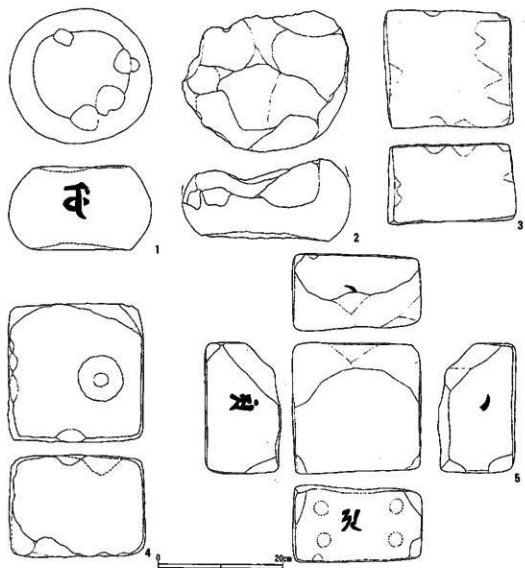
採集品 第20図6、第21図2・4は遺跡周辺での採集品。安山岩製（第20図6・第21図4）、デイスait製（第21図2）がある。



第19图 播白・石白実測図 (1/6)



第20图 五輪塔実測图①(1/6)



第21图 五輪塔実測図② (1/4)

表2 土器一覽表

図	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	出土地点	備考
9-②	1	13.2	7.8	3.0	砂質	明茶褐	1溝 上層	1~15、一括
	2	7.3	4.0	2.7	"	"	"	
	3	13.0	6.8	2.9	"	"	"	
	4	12.1	6.7	2.8	"	茶褐	"	
	5	12.3	6.6	2.9	やや緻密	明茶褐	"	
	6	7.9	4.3	1.7	砂質	白褐	"	
	7	7.6	4.3	1.7	"	"	"	
	8	8.2	4.6	1.7	"	"	"	
	9	8.3	5.0	1.9	"	茶褐	"	
	10	12.2	6.6	2.6	やや砂質	明茶褐	"	
	11	8.5	5.0	1.8	"	茶褐	"	
	12	11.0	6.2	2.2	砂質	明茶褐	"	
	13	7.6	4.0	1.8	"	白褐	"	
	14	8.5	4.4	1.4	"	"	"	
	15	7.5	4.2	1.9	砂質	茶褐	1溝 上層	
11	1	(6.5)	2.7	1.8	緻密	白褐	1溝	1/4片
	2	(7)	(2.8)	2.1	砂質	"	1溝 上層	1/4片
	3	7.8	4.5	1.7	"	白褐	" "	
	4	7.5	4.3	1.4	"	茶褐	" "	
	5	7.2	4.4	1.7	緻密	黒	" "	内外煤
	6	(7.7)	(4.0)	1.6	"	白褐	" 中層	
	7	7.7	4.0	1.9	"	"	" 上層	
	8	(7.5)	4.0	1.9	砂質	茶褐	1溝	
	9	8.3	4.9	1.9	緻密	黒	1溝 底直	煤全体
	10	(8.2)	4.6	2.0	"	灰褐	1溝	内面一部煤
	11	7.6	4.0	1.7	"	白褐	1溝 上層	
	12	(7.6)	(4.2)	1.6	"	"	1溝	1/4片
	13	7.6	4.5	1.9	砂質	茶褐	1溝 上層	
	14	(8.0)	(4.5)	(1.6)	緻密	"	" "	1/4片
	15	8.4	4.9	1.9	"	白褐	" 中層	胎土、成形16に類似
	16	7.5	4.3	1.9	"	"	" "	" 15 "
	17	(8.8)	(4.2)	(3.0)	やや緻密	茶褐	" "	1/4片
	18	9.3	4.8	2.6	砂質	茶褐	" 上層	
	19	10.2	5.5	2.3	"	赤褐	" 中層	27、33、37と共伴
	20	(10.3)	5.7	2.5	緻密	灰褐	" 上層	内面一部煤、1/4片
	21	(9.8)	(6.0)	2.3	砂質	白褐	1溝	
	22	10.5	6.2	2.2	"	"	" 上層	
	23	(10.5)	(5.5)	2.3	"	"	" "	糸切後整形丸底
	24	(11.2)	(6.3)	(2.1)	"	茶褐	" "	1/4片
	25	10.6	5.6	2.2	やや緻密	白褐	" "	
	26	(11.0)	(5.7)	(2.6)	緻密	茶褐	" 中層	1/4片、器形20に類似

図	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	出土地点	備考
11	27	10.6	5.2	2.7	やや砂質	赤褐	" "	19、33、37と共伴
	28	11.6	5.3	2.7	"	茶褐	" 底	
	29	(10.3)	(5.4)	(2.4)	"	"	1溝	1/2片
	30	11.0	5.6	2.4	砂質	茶褐	"	
	31	12.0	6.3	2.8	"	灰褐	"	内面煤
	32	(12.3)	(5.9)	2.9	"	白褐	"	
	33	12.5	6.3	2.7	緻密	茶褐	1溝 中層	19、27、37と共伴
	34	(11.8)	(6.0)	2.7	砂質	"	" 上層	
	35	12.6	6.5	2.7	"	"	" "	
	36	(13.0)	(6.7)	2.5	"	"	" "	
	37	12.3	6.2	2.9	やや砂質	"	" 中層	19、27、33と共伴
	38	(11.8)	6.0	3.0	砂質	白褐	" 上層	
	39	(12.5)	(6.5)	3.1	"	灰褐	1溝	1/2片
	40	12.5	6.0	2.5	緻密	白褐	1溝 中層	
	41	(13.3)	(8.0)	(2.9)	やや砂質	黒褐	" 上層	1/2片
	42	12.5	7.5	2.8	やや緻密	白褐	1溝 上層	
	43	13.9	6.7	3.3	緻密	"	" 中層	
	44	13.9	6.6	3.3	やや緻密	"	" "	
	45	(13.4)	(6.8)	2.9	やや砂質	茶褐	1溝	内面煤、1/2片
	46	12.0	6.5	2.5	砂質	"	1溝 上層	
	47	(7.5)	(4.8)	1.7	"	"	方形区画5	1/2片
	48	(7.7)	(5.1)	1.9	緻密	灰	" 5	内面融溶物、1/2片
	49	(7.5)	(4.4)	2.0	やや砂質	茶褐	" 5	1/2片
	50	(7.7)	(4.4)	1.6	砂質	赤褐	" 3	1/2片
	51	7.6	4.9	1.6	"	茶褐	" 3	
	52	(9.5)	(5.2)	1.8	"	"	" 5	1/2片
	53	(9.7)	(6.0)	2.4	"	灰褐	" 5、底	1/2片
	54	9.5	4.4	2.6	緻密	茶褐	" 3、中層	
	55	9.5	4.7	2.4	"	"	" 5、"	
	56	10.0	5.0	2.2	砂質	"	" 3	1/2片
	57	10.2	5.5	2.4	やや砂質	黒褐	" 3、中層	内面煤
	58	10.7	5.6	2.5	砂質	白褐	" 5、"	1/2片
	59	10.6	5.2	2.5	"	"	" 3、底	"
	60	9.8	5.3	2.3	"	茶褐	" 5、"	
	61	(11.0)	(5.3)	2.1	"	"	" 7、上層	1/2片
	62	11.8	6.5	2.6	"	"	" 3	1/2片
	63	12.0	6.4	2.9	"	"	" 3	内面煤
	64	(11.8)	(6.5)	3.2	"	"	" 3、底	1/2片
	65	12.2	7.5	2.3	やや砂質	"	" 5、中層	
	66	(12.2)	(6.6)	2.6	"	灰褐	" 5、底	1/2片
	67	12.6	7.0	2.7	"	"	" 5、中層	
	68	(12.6)	(6.7)	2.7	砂質	黒褐	" 5、底	内面煤、1/2片

図	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	出土地点	備考
11	69	(12.2)	(6.3)	3.2	やや緻密	白褐	" 5	1/2片
12	1	8.2	4.3	1.7	緻密	白褐	1溝 中層	
	2	10.8	5.2	2.4	砂質	茶褐	1溝	
	3	(12.5)	5.8	2.6	砂質	明茶褐	1溝 中層	1/2片
	4	12.4	6.3	2.2	"	茶褐	" 下層	煤
	5	8.5	4.9	1.9	緻密	白褐	2溝 西端	
	6	(8.7)	(4.5)	(2.0)	やや砂質	赤褐	" "	1/2片
	7	(7.7)	(3.5)	(1.6)	砂質	茶褐	2溝	1/2片
	8	(9.3)	(4.7)	2.4	"	明茶褐	2溝 西端	1/2片
	9	(11.0)	(4.9)	2.8	やや砂質	赤褐	2溝	1/2片
	10	(11.3)	(6.1)	2.6	"	"	"	1/2片
	11	(12.5)	6.7	2.4	"	灰褐	"	1/2片、煤
	12	7.7	4.3	1.8	緻密	白褐	方形区画7	上層
	13	7.6	5.0	1.8	砂質	"	" 5	"
	14	(11.4)	5.7	2.2	やや砂質	茶褐	" 18	土手
	15	12.2	6.2	3.3	砂質	明茶褐	" 5	上層、1/2、煤
	16	(12.7)	(7.0)	2.4	"	茶褐	" 7	1/2片
	17	13.0	6.5	3.2	やや砂質	"	" 7	散在接合
	18	(6.7)	—	(1.3)	緻密	白褐	1溝	1/2片
	19	(8.5)	—	—	"	黒褐	"	"
	20	(9.2)	—	—	やや緻密	白褐	"	"
	21	(9.3)	6.2	4.3	"	明茶褐	1溝 上層	1/2片
	22	(10)	(4.4)	(2.2)	砂質	茶褐	1溝	墨書
	23	(11.8)	(6.4)	(3.0)	"	"	"	"
	24	—	(5.3)	—	緻密	白褐	グリッド	刻書
	25	13.2	7.3	2.9	やや緻密	茶褐	1溝	底拓本
13	1	(14.8)	—	—	緻密	明茶褐	1溝 上層	1/2片
	2	(10.7)	—	—	"	茶褐	" 区画5	1/2片
	3	(15.0)	—	—	"	明茶褐	方形区画5	1/2片
	4	(14.0)	—	—	"	"	1溝 上層	"
	5	(15.6)	—	—	"	"	"	"
	6	(13.2)	—	—	砂質	茶褐	方形区画5	"
	7	—	8.4	—	緻密	灰色	1溝 上層	
	8	30.4	16.0	9.2	やや砂質	茶褐	方形区画5	中層
	9	(29.2)	(11.8)	(11.2)	緻密	灰褐	1溝 上層	1/2片
	10	(34.2)	14.7	11.8	"	赤褐	" 中層	
14	1	(20.8)	—	—	砂質	茶褐	方形区画3、床	1/2片、外面煤
	2	28.6	23.2	16.4	"	明茶褐	1溝 中層	1/2欠、"
	3	(27.5)	(17.5)	14.0	瓦質	灰	方形区画3	1/2片
	4	(25.5)	—	—	砂質	明茶褐	1溝 中層	
	5	(33.0)	—	—	"	"	"	"、外面煤
	6	(34.6)	—	—	"	"	方形区画3	"、"

第4章 遺物・遺構の検討

第1節 土器類について

(1) かわらけ

100個体を越える量のかわらけが出土したが、これらの法量については前章で述べたように概ね「小」「中」「大」の三つのグループとしてとらえることができた(第10図)。図示した104個体については①小型—37個体、②中型—30個体、③大型—37個体となり、中型がやや少ないもののそれぞれ三分の一ずつに近い数値となっている。これら3種が時期差に基づくものではなく、使用時のセットであることは言うまでもなく、1号溝上層から一括して出土した15枚のかわらけ(第9図)からも推測されるところである。これらは小型9枚・中型1枚・大型5枚という組み合わせであった。また4枚が重なって出土した第11図19・27・33・37は中型2枚・大型2枚である。「かわらけ」の性格については、儀式等の際に用いられ、使用後に一括廃棄されるとも言われている。本遺跡では1号溝と方形区画3および5区からの出土が目立っているが、ここからは内耳土器や播鉢など日常雑器とともに出土しており、多くは廃棄されたとみられるものである。但し廃棄といっても先の4枚やその付近のもののように一括して廃棄される場合と、日常雑器とともに不要になったものあるいは破損したものを廃棄するといった幾つかの状況があったものと思われる。これに対して上層出土の15枚は単なる廃棄とは考えにくい出土状況である。これは1号溝が完全に埋没した段階のものであり、鉛玉・弁・鉄軸小壺が出土した付近の方形区画3や5の上層に共通した段階の遺物とみられるものである。この15枚の出土状況は第9図に示したとおりであるが、特に大型と小型とを組み合わせ意図的に置いたような感がある。墓墳などを想定し調査を進めたが、特別な施設は確認できなかった。あるいは祭にかかわるような行為も考える必要があろう。これらの時期については、近くから出土した鉄軸小壺・弁・鉄砲の鉛玉と15枚の一括かわらけの最下層とのレベル差はそれぞれ7cm、8cm、10cmとかわらけの方が低い程であり、ほぼ同一時期と見てもよい。鉄軸小壺は16世紀後半に位置付けられるもので、鉛玉も戦国時代のものとみられ、従って15枚のかわらけもこの時期と考えておく。ところで1号溝にあっては他に覆土中層や底面からもかわらけが出土しており、これらの時期差も問題となるところである。底面付近出土は第11図9・28・第12図4の3点であり、28がやや丸味のある器形である他、4は上層の第11図36等に類似するなど、中層や上層の遺物と顕著な差は認められない。また中層出土の第11図15・16、第12図1は第11図11や第11図12に類似しておりやはり差は少なく、かわらけから見た時上層から下層までの時期差は顕著ではない。但し土層の堆積状況からは中層下部に薄い砂層があり、この上の黒味の強い層に木質や土器が多くみられることから、この段階で一定の期間水が流れていたことが分かる。

その後溝が廃棄され、多くの遺物が堆積（廃棄）したものと思われるが、かわらけの型式を交えるような時間差はなかったことになろう。なお、胎土や成形によく類似した群が認められたが、これは生産地を意味するものではなかろうか。また、第12図25の底部には糸切り後に板の上に置いたような跡が見られるが、同時に見込み部にナゲが認められることから飯田陽一氏の指摘¹に該当するものと思われる。

(2) 生活用具のセット

・加工、調理用具

石製品では石臼、搗臼（第19図）がある。石臼は上臼破片でよく使いこまれている。搗臼としたものは細かく擦りつぶす道具と思われるものであるが、本遺跡で出土したものは石搗鉢²や搗臼³とされるものとは形態的に異なっている。底面は平坦ではなく丸味をもっており、4を除き20cm以下の小型品である。2と3は内面が摩滅しており擦ることに用いられたことが分かる。1は摩滅よりも敲打痕が目付き、搗臼として用いられたかもしれない。また4については窪みが浅くしかも敲打痕しか見られない。使用が若いのかあるいは別の用途を考えるべきなのだろうか。なお大輪寺東遺跡⁴からは「かくらさん」の軸受石とした石製品が出土したが、これは底部まで貫通した摩滅部とやや窪んだ底部をもつもので、これとも異なった形態である。5は凹石状の石製品で、長野県大井城跡⁵でも類例があり、本県では白州町坂下遺跡⁶、桜井畑遺跡A地区⁷などの戦国時代の遺跡から出土している。坂下例については調査者の折居氏はすりつぶし用としながらも、水路状遺構周辺から内耳土器と共存して出土していることに用途上の手掛かりを求めている。本遺跡のものも底部に安定面を持ち、窪み部はよく摩滅しているものであり、片手で押さえ片手で擦りつぶすといった道具であろう。土製品には搗鉢、内耳土器、茶釜型土器がある。搗鉢はよく使い込まれており、特に第13図8の内面は摩滅が激しい。また9の外面には全体的に煤が付着しており、火にかけられ使用されたことも考えられる。内耳土器についてはいずれも推定復元であるが、口径30cm以上のものと20cm台のものとがみられる。茶釜型土器とみられるものは6点ある。外面に煤が付着している例があり、第13図1は口縁外面にまで付着、2・4・5は胴の最大径部分以下に付着している。特に2は耳下の突起外面まで煤が見られ、煮沸具であることが分かる。

・食器、食膳具

かわらけ、漆器、陶磁器、折敷、箸などがある。前述したようにかわらけは大中小がセットとなり、さらに陶磁器や漆器も組合わさったことも考えられる。

・その他の生活用具

下駄や曲物、紡錘車それに用途不明の木製品がある。また図示できなかったが瓢箪の破片が出土しており、容器として使われていたと思われる。かわらけのうち煤の付着したものが10点程あり、燈明皿として用いられていたことが分かる。なお、溶融物の付着したかわらけがあり、金属を溶かしたものとみられる。

・寺にかかわる遺物

五輪塔、卒塔婆、土師質の香炉型土器などがある。また墨書されたかわらけ2点があるが、第12図の「圓(雄)」「常禪」ともに寺にかかわる文字と思われるものであり、今村文匠氏によるといずれも僧の名前ではないかとのことである。

第2節 遺構の時期と性格

(1) 1号溝・2号溝

これらの溝が水路として機能していたことは、覆土中位以下に堆積している砂層からも分かるとおりでである。但し砂層は底面から12cm程の厚さがあるとともに、それより上位の土層中にも薄いながら砂層が認められることから、埋没しながらも機能していたことがわかる。遺物は下層の砂層からは比較的少なく、中位・上位の黒褐色土層に多い。特に中位では木製品を始めとして葉や枝それに種子など植物質のものも顕著であった。また上層ではかわらけや石製品が多く出土している。これらの成果から、覆土中位程をもって溝の機能が停止し、生活品が廃棄されながら埋没していったものと考えられる。木製品が覆土中位上面に多かったことはやはりこの層が溝の最終段階であったことにならう。その後溝は埋められたものと思われるが、この時に多くの生活品もまた廃棄されたものであろう。但し、前項で述べたように15枚セットのかわらけのような出土状況もあり、溝が完全に埋まった時点でなんらかの祭祀が行われたことも考えられる。なお、溝最上層から出土した石臼と18m程はなれた方形区画5の覆土下部から出土した石臼とが接合するものであり、これらが後世動いていないものならば、1号溝と方形区画5とは同じころ機能が停止し、埋められたものと考えられる。なお、出土遺物にそれほどの時間差が認められないことから、これらの行為は比較的短期間のうちになされたものと思われる。ところでこの時期が問題となるが、まず1号溝や方形区画3および5等を覆う上層から鉄軸小壺や鉄砲玉が出土していることから、16世紀後半が一つの目安となる。1号溝西コーナー付近の底面近くからは大窯系皿破片が出土し、また溝覆土中位から出土した銭貨は全て北宋銭であったことから、溝の機能した最終時期も戦国時代後半とすることができよう。また、2号溝については遺物は少ないながら、かわらけからみて1号と顕著な差がないことから同様の時期としておく。

さてこの地域の地形は西→東・北→南と緩く傾斜しており、1号溝においても当然この方向で水が流れることになる。溝底面の傾斜もこのとおりでであることから、1号溝は西から東に流れる(10区～14区)とともに、北から下ってくる部分(16区)とが15区あたりで合流しさらに南下することが考えられる。但し調査区外に延びることから今回は確認できなかった。

これらの溝は、次の項で詳しくふれられる「福寿院」の寺域を流れる水路であるが、この1号溝の西側には戦国期の遺構や遺物はなんら発見されてはおらず、寺院境内を区画する重要な溝で、あったことも確かであろう。

(2) 方形区画遺構

長軸が3m前後の長方形ないし方形の区画28箇所程が整然と検出されたが、不明瞭な区画2を除き大きいものでも一辺が5mを超えるものではない小区画から構成されるものである。これら区画の在り方については第3章で説明したように、各区画底面のレベルが異なっており、全体として西より東、北より南がそれぞれ低くなっている。これは地形の傾斜と同じであり、一つに水の流れが意識された可能性がある。また、区画1から区画8までの1号溝際には粘土による土手状の高まりが沿っていることは、1号溝の存在が意識されていたことになる。この土手については第7図の土層断面図にも明らかである。また、区画8の東壁は1号溝の西壁にあたるが、ここにも粘土の土手が走っている。特にこの区画8はやや歪んだ長方形であるが、これは1号溝の西壁に規制されているからであろう。同様に最も小さい区画である区画9の規模・形状も7・8両区画および1号溝に規制されたものとみられる。なお、区画9の東土手の一部は1号溝内に張り出しており、溝が縮小した折りに、その覆土上に粘土を貼った可能性がある。これらのことから、方形区画は1号溝とともに機能していた可能性が考えられる。2号溝との関係についても、それぞれ重複はしておらず意識されて構築されていたものと思われる。これらの時期については、前項の1号溝のところでも述べたとおり、区画3や区画5を覆う上層（底面より25cm程度上層）から16世紀後半の遺物が出土していること、1号溝と同様の時期に機能していたと考えられることなどから、方形区画もこの頃の時期に位置付けておきたい。また、区画3の溝際の土手に張り付いた状態で北宋銭が出土していることも参考になる。なお、区画3からは五輪塔の部位や日常雑器、区画5からも石臼や土器類が出土しており、1号溝と同時に生活品が廃棄され、そして埋められたものとみられる。この埋められた層の最上層が戦国時代最後の面であり、斧や鉄砲玉それに陶磁器などはこの面に伴う遺物ということができよう。この層より上には江戸期の面があったとみられるがすでに削平されてしまったようで、今回は確認できなかった。但し、方形区画遺構の中には18世紀代の伊万里製磁器が出土したり、切り合いの見られる箇所もあることから、江戸時代まで使われた部分もあったとみられる。陶磁器からみても、第3章でふれたように16世紀後半代と18世紀代とのグループに分かれる傾向があり、全体的にも上層からは江戸期の遺物も目立っている。方形区画1・3・7・25・26・28などの覆土中からは伊万里製とみられる磁器破片が出土しているが、特に区画7では複数みられた。

切り合い箇所については、方形区画18・19がある。この部分には第5図のスクリーントーンで示したように白色粘土による大きめの土手が観察された。おそらく2号溝に沿って土手あるいは堤状の施設が、後から作られたものとみられるが、この土手下の区画は时期的に遡るものである。また、1段高い区画10の周囲には土手がみられず、1号溝や区画8・11・12などにより切られた可能性が考えられる。これらのことから、方形区画は时期的にある程度の幅をもって形成されたものと考えておきたい。

では方形区画とは何であろうか。調査当初まず浮かんだのは古い時代にみられる小区画水田

に類似しているということであった。次に、本遺跡の北約800mに位置する新居道下遺跡で調査中の粘土採掘坑にもよく似ているということであった。これは現地表下1.2m程に発見されたもので一辺3~5mを測る方形の跡で、区画する土手の状況も似たものであった。この地域は瓦の生産地としてよく知られている所である。伝承ではその発祥を享保元年(1716)としており、さらに嘉永4年(1851)および嘉永5年の記録には甲府城内修復用瓦についての記載がある¹⁾。また、かつては24箇所もあった法善寺の子院も江戸後期には荒れ果て、それら寺域でも瓦のための粘土が採掘されたという『甲斐国社記・寺記』の記録もある。このような地域的・時代的背景のもと、新居道下遺跡での調査成果を踏まえた時、本遺跡の方形区画を粘土採掘坑とみる考え方も捨て難い。但し、第3章でみた方形区画の属性―底面のレベル差・土手の状況・その他の施設の在り方は粘土採掘坑には否定的であろう。まず底面のレベル差からは、1号溝とのかかわりも含む中で、やはり水に対する意識が窺われるものである。粘土採掘坑とされる讃岐国山田郡田図比定地域遺跡²⁾の事例や新居道下遺跡での在り方でも底面のレベル差はそれほど顕著ではない。また土手の状況については、貼付け粘土により土手が作られた部分があり、これも採掘の掘り残しによる土手とは異なるものである。さらに、土手の切れている部分があり、水との関係からこれを水口と考えることも可能である。また粘土層の厚さであるが、粘土層上面とみられる区画1の西外側と区画1の底面とのレベル差は25cm程度であり、仮に粘土採掘とした場合その程度の粘土しか採集されなかったことになる。

以上の点を踏まえ、帝京大学山梨文化財研究所の外山秀一氏にプラント・オパール分析を依頼した。その結果次のような成果を頂戴した。なお、資料は区画26の底面粘土層(試料1)および同区底面より上部12cmの覆土中(試料2)から採取したものである。

1. 遺跡では不定形小区画の遺構が28面検出され、区画内底面(試料1)と区画内覆土(試料2)の部分の構成層から定量分析用の試料を採取した。
2. 分析の結果、試料1では全般的に検出量は少ないが、イネの機動細胞プラント・オパールが見られ、試料2ではそれは多量に検出される。

従って、試料2の層準における稲作は疑いなく、また比較的安定した土地条件のもとで稲作の営まれていたことが考えられる。

3. 区画面からは16世紀の五輪塔、その上位層からは16~18世紀の遺物が検出されており、開田の時期の下限が明らかになった。
4. かかる遺構については、次の二通りの解釈がある。すなわち、粘土採取のための掘り込みによって畦畔状の遺構になったとする考え方と、水田址そのものであるとする考え方である。当遺跡周辺では、近世に瓦用の粘土を採取していたことが知られており、新居道下遺跡においてもそうした遺構が検出されている。従って、かかる区画遺構は後世における粘土採取の結果であることも考えられる。

こうした遺構が粘土採取に伴うものであるとすると、それを埋積する地層中にはその時期およびそれ以前の遺物の混入が考えられる。しかしながら、28面の区画遺構の埋土中から出土した遺物には時期的な差異が生じている。

また、粘土採取の場合はほぼ等間隔に掘り込まれることが多く、しかも埋め戻された土はシルトや粘土のブロックを混入して粒度は不均質であるが、当遺跡の埋土にはそうした状況はみられない。

これに対して、当遺跡の遺構は、現在の地表面の起伏に対応して遺跡の西から東にかけやや段差をもって低くなっており、その西で検出された溝の水利を利用した開田の可能性が考えられる。とすると、水田は遅くとも18世紀までには拓かれていたことになり、寺域内における小規模な稲作の状況が示唆される。

上記の結果から判断すると、かかる遺構は水田址の可能性が高い。

以上のようにプラント・オパール分析からは水田の可能性を認める成果が得られたことになる。但し、粘土採掘後その箇所を利用して水田とした場合、上記のような結果にもなる。しかし、これまで検討したように水田としての可能性が高いように思われるが、そうした時、寺域内でのかような小区画水田の意味が問題となるところである。福寿院という寺院の性格に伴う特殊な水田であったのだろうか。また寺域内だけにあった施設なのだろうか。これらの点については今回の調査は極めて限られた範囲であり、今後の調査に期待することになる。いずれにしても、時期的には16世紀代には遡り得るとともに江戸時代にも機能した「水田跡」に可能性をおきながらも、この地域の性格を表す粘土採掘坑の在り方にも注意していきたい。

(新津 健)

註

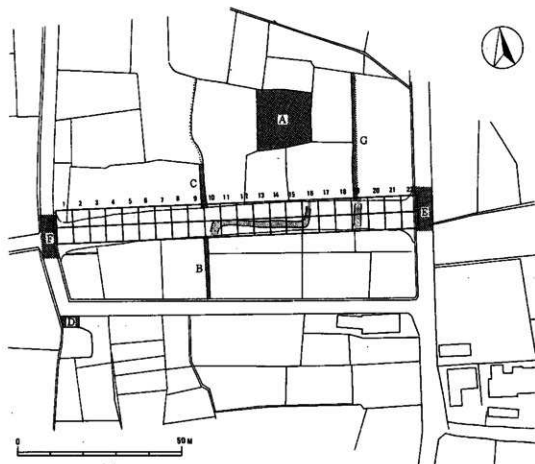
- 1 脚群馬県埋蔵文化財調査事業団「浜町屋敷内遺跡C地点」1985
- 2 註1に同じ
- 3 佐久市教育委員会「大井城跡」1986年
- 4 山梨県教育委員会「大輪寺東遺跡」1990
- 5 註3に同じ
- 6 白州町教育委員会「坂下遺跡」1988
- 7 山梨県教育委員会「桜井畑遺跡A・C地区」1990
- 8 小島 勇「加賀美の瓦」『若草町誌』1990
- 9 高松市教育委員会「弘福寺領横岐国山田郡田岡比定地域発掘調査概報」1988

第3節 福寿院について

今回の発掘調査において、建物跡など主要な伽藍や創建期とされる鎌倉時代の遺物・遺構については検出することができなかったものの、検出された遺構・遺物から福寿院の歴史の中で戦国期と江戸期では寺の様相に違いのあることが明らかになった。これは福寿院をめぐる当時の政治的・社会的環境の変化によるものと考えられる。

このような成果をふまえて、調査区外で推定寺域にあたる場所について触れたいと思う。

第22図のA地点において、かわらけ片・陶磁器片を数多く表面採集することができた。とり



第22図 福寿院の範囲

わけ18世紀のものと思われる陶磁器片が多く確認され、現況は周囲より一段高いほぼ正方形を呈していることから江戸期における建物の跡の可能性が高い。19世紀の「法善寺境内図」に描かれた1棟の建物についてはA地点よりもさらに北にあったような印象を受けるが、この他に建物が描かれていないことから同一の建物かも知れない。また、寺域の北西隅にあるL字型の池については現況から知ることはできないが、以前は水の出やすいところであつたらしく、池の存在を想定することは可能である。

B・C地点については、周囲より高まった1mほどの道であるが、推定寺域のほぼ中央を南北に伸び、伝承によると福寿院境内の参道とされている。最近までは付近の田畑に行く際に利用された唯一の道で、発掘調査において確認された1号溝の西端がこの道の東で終わっていることから寺域の中で道として意識されていたことが推察される。

D地点については、現在、六地藏と耕作の際に周辺から出土した五輪塔の部材が集められている。「法善寺境内図」にはこの地点には「虫歯塚」と書かれている。

E・F地点については、推定寺域の東辺、西辺にあたるため発掘調査において寺域を区画する何らかの施設の存在を想定したが、該当するような遺構は検出されなかった。このうち、F

地点については、現況と同様、絵図においてもここから西に向かって延びる道が描かれている。したがって西門などの施設があっても不思議はないが、寺域の西辺の道については以前は幅が現在の半分以下であり、のちに道の東側に拡張して現在のような姿になったことから、区画施設なり門なりがあったとしても調査区外になる。

G地点については田畑にはっきりとした段差が見られ、この延長上に2号溝があることから、南北に延びる区画として意識されていた可能性がある。

次に甲西バイパス建設に伴う二本柳遺跡の発掘調査において寺域の真東から見つかった遺構について福寿院との関連で考えると、平成2年度の試掘調査の段階で発見された墓墳から出土した木札には「悟故十方空」、「本来無東西」という墨書があり、これは真言密教の偈文の一節である¹ことから、福寿院に付属した墓地がこの地にあった可能性がある。また、平成3年度の本調査において発見された7基の井戸の中からは、今回1号溝から出土したのとほぼ同じ時期のものと思われるかわらけ片が見つかった。これらの遺構も福寿院と関係のあるものと思われる。

最後にかつて法善寺周辺で盛んであった瓦産業との関わりについて前節と重複するところもあると思われるが少し述べてみたい。

慶応4年(1868年)の『甲斐国社記・寺記』においては、法善寺の塔頭「普門院」²の項に「右ハ加賀美七十年已前より瓦商売相始候ニ付自然瓦土取去大分田畑相成候由ニ御座候」とあり、また「宝積」の項には「坊跡の義甲府城御用瓦焚出方ニいたし置き百姓ト替地いたし置候とある。若草町加賀美で瓦が焼かれ始めた時期については、伝承によると享保元年(1716年)とされ、普門院についての記述とでは約80年の差がある³。したがって加賀美における瓦焼成の開始時期については確定できない。一方、甲府城の瓦が加賀美で焼かれていたことは古文書などからも明らかであり、甲府城の発掘調査でも「西郡加賀美」の刻印のある瓦片が出土している。

前述の二坊の記載内容から、加賀美の瓦焼成が甲府城の修復との関係で行われたことがわかる。それはこの周辺で瓦の原料となる粘土が豊富に採取できることによるものであり、粘土の採掘はすでに廃寺となった法善寺の塔頭の跡地でも行われた。そして採掘した跡は百姓との間で土地の交換がなされ、田畑として利用されたわけである。

このようなことに加え、調査区東端近くでは戦国期の遺物がほとんどなく江戸後期の陶磁器片が少量見つかっている程度であること、ここが調査区の中で江戸末期頃から法善寺周辺に点在するようになる瓦屋に最も近いところであることなどから、今回の発掘調査で検出された方形区画に関しても粘土を採掘したのち、田畑として利用したものではないかという推測も成り立つ。このような行為があったと仮定して、その時に福寿院が寺院として機能していなかった場合と機能していたが衰退して寺域内に異なる施設が入り込んできた場合が考えられる。

いずれにしても、福寿院の詳細を知るためには寺域内のさらに別の箇所を発掘調査を待たなければならぬ。

(五味信吾)

註

- 1 石川県の桜町遺跡、静岡県の道場田遺跡、広島県の三日市遺跡でも同様な木札が出土している。今村文匡氏のご教示によれば、「述故三界域 悟故十方空 本来無東西 何処有南北」の文を1節ずつ4枚の木札に書いて棺に入れたものと考えられる。木簡学会『木簡研究 2号、6号』1981、1984、岡山県埋蔵文化財調査センター『ひろしまの遺跡 第46号』1991
- 2 普門院については、前述の元龜3年（1572年）の武田信玄の折腰文にも見えるが、慶長6年（1601年）の検地帳には見えず、この時点で既に廃寺になっていた可能性がある。
- 3 『若草町誌』を参照

圖 版



1. 遺跡近景



2. 遺跡全景



1. 1号溝



2. 1号溝かわらけ出土状態



1. 1号溝部分



2. 1号溝遺物



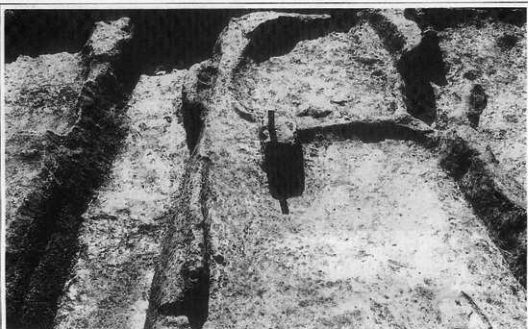
3. 1号溝土層



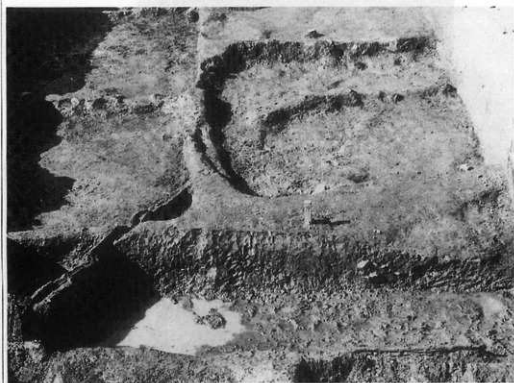
4. 1号溝遺物



5. 1号溝遺物



1. 1号溝と方形区画



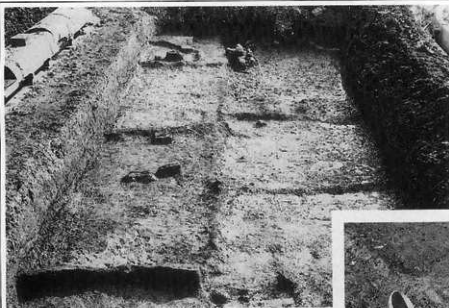
2. 2号溝と方形区画



1. 方形区画遺物出土状況



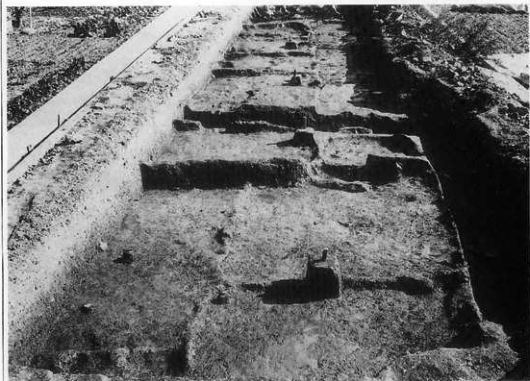
2. 方形区画遺物出土状況(部分)



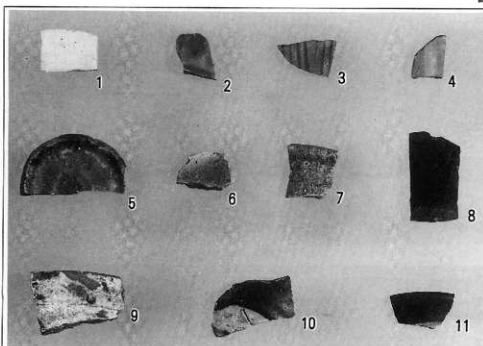
1. 方形区画



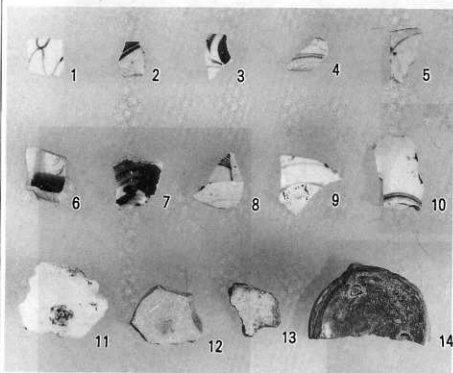
2. 土手際の土器



3. 方形区画



1. 陶磁器



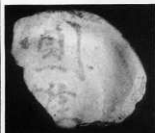
2. 陶磁器



1. 一号濠出土
一括かわらけ

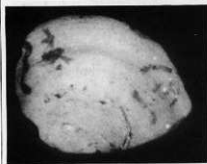


2. かわらけ



3. 墨書土器

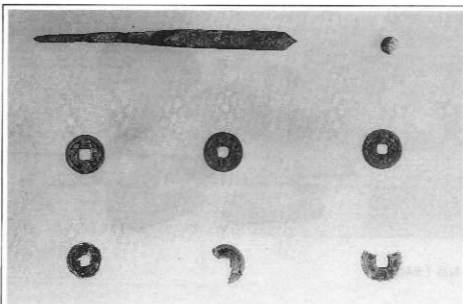
内面



外面



4. 墨書土器



1. 斧・鉛玉・錢貨



2. 鉄釉小壺



3. 擂鉢



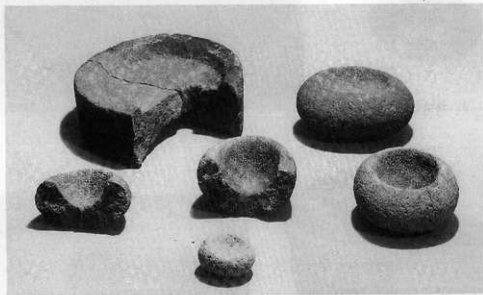
4. 内耳土器



5. 擂鉢



1. 石製品（五輪塔）



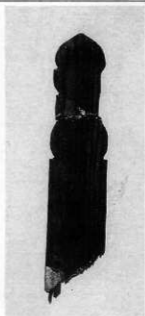
2. 石製品（石臼・搗臼）



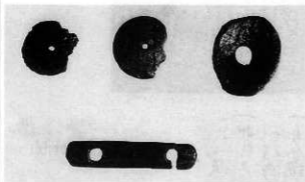
1. 漆器



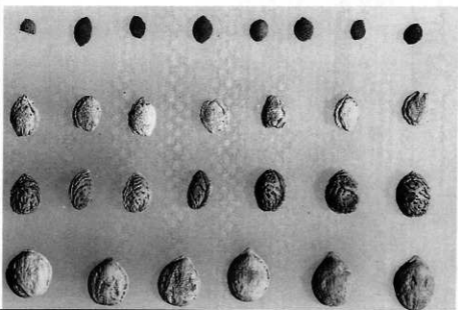
2. 漆器



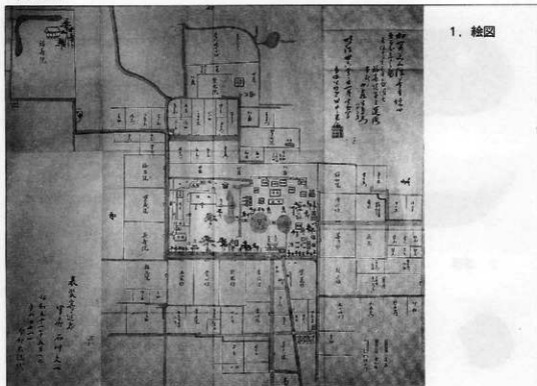
3. 卒塔婆



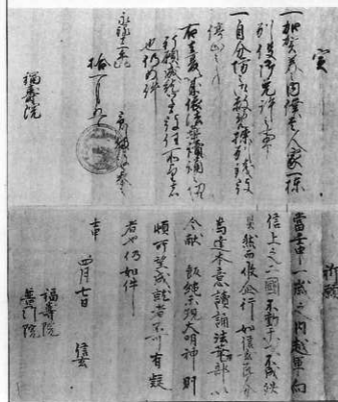
4. 紡錘車・他



5. 種子



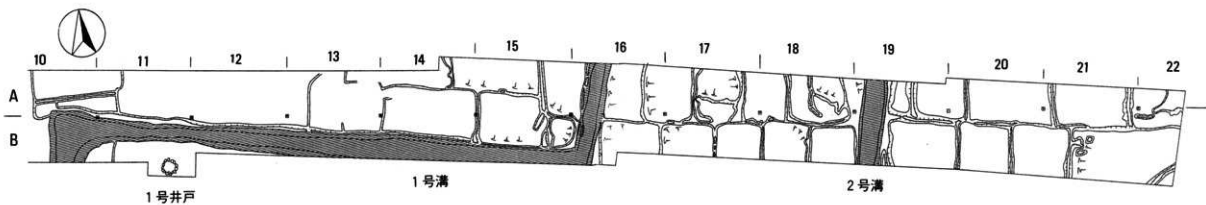
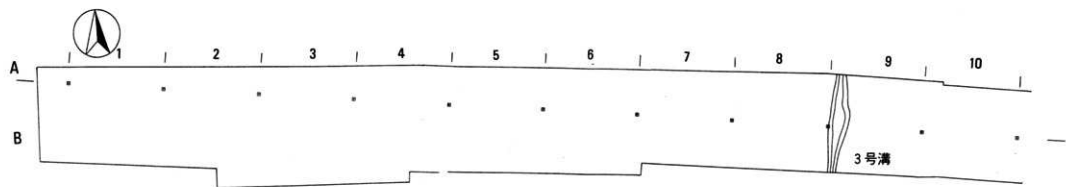
1. 絵図



2. 「武田家印判状」

3. 「武田信玄祈願文」

(法善寺所藏
絵図及び古文書)



付図 全体図 (1/200)

報告書概要

フリガナ	ニホンヤナギ		
書名	二本柳遺跡		
副題	農道建設に伴う中世寺院跡の発掘調査		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告第72集		
主著者・従事者	新津 健・五味信吾		
発行者	山梨県教育委員会		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3881		
印刷所	備ヨネヤ印刷		
印刷日・発行日	印刷 1992年3月20日 発行 1992年3月30日		
二本柳遺跡	所在地	山梨県中巨摩郡若草町加賀美字山宮地	
	25000分の1地図名・位置	小笠原	138° 29'、35° 36'
概	主な時代 中・近世	戦国時代～江戸時代	
	主な遺構 溝、他	戦国時代を中心とした溝2本、小区画水田址あるいは粘土採掘坑の可能性もある方形区画遺構。	
	主な遺物	陶磁器（青磁、白磁片、鉄軸小壺、国産染付片等）、かわらけ、内耳土器、茶釜型土器、播鉢、漆器、石臼、播臼、五輪塔、卒塔婆、銭貨、鉛玉、斧	
	特殊遺構 特殊遺物	木製品（漆器、紡錘車、下駄等）、種子類	
要	調査期間	1991年10月1日～1991年12月11日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第72集

1992年3月20日 印刷

1992年3月30日 発行

ニホンヤナギ
二本柳遺跡

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 0552-66-3881

発行 山梨県教育委員会

印刷 備ヨネヤ印刷

